

基町プロジェクト・シンポジウム2016

# 「広島基町高層アパートと大高正人 ドキュメント」



## 「広島基町高層アパートと大高正人」

開催日・2016年11月12日〔土〕

会場・広島市立基町小学校体育館（広島市中区基町20-2）

主催・広島市立大学、広島市中区役所

共催・文化庁

協力・基町地区社会福祉協議会、基町連合自治会、アーキウォーム広島

来場者数・261名（入場無料）

シンポジウム 14..00 - 14..30  
〔開会〕基町地区社会福祉協議会会長挨拶、シンポジウム趣旨説明他

〔発表1〕「基町における応急住宅・不法住宅の成立とその後」石丸紀興（元広島大学教授、広島諸事・地域再生研究所代表）

〔発表2〕「基町高層アパートの計画」藤本昌也（株式会社現代計画研究所取締役会長、日本建築士会連合会名誉会長）

〔発表3〕「基町住宅地区の活性化の取組について」小林礼幸（広島市都市整備局住宅部住宅整備課基町住宅担当課長）

〔パネルディスカッション〕登壇者・石丸紀興、藤本昌也、小林礼幸／司会・松隈洋（京都工芸繊維大学教授）

〔質疑応答〕会場にて事前回収したアンケートによる

### 〔関連イベント1〕 基町高層アパート見学会

日時・2016年11月12日 11..00 - 12..00

会場・基町高層アパート屋上他各所

見学会講師・藤本昌也／高田由美（アーキウォーム広島副代表）

参加者数・37名（参加費無料・事前予約制）

### 〔関連イベント2〕 もとまちカフェ

日時・2016年11月12日〔土〕 10..00 - 14..00

会場・基町ショッピングセンター中央広場

参加者数・186名

## 目次

〔発表1〕

「基町における応急住宅・不法住宅の成立とその後」  
石丸紀興

〔発表2〕

「基町高層アパートの計画」  
藤本昌也

〔発表3〕

「基町住宅地区の活性化の取組について」  
小林礼幸

〔パネルディスカッション・質疑応答〕

石丸紀興、藤本昌也、小林礼幸  
司会・松隈洋

〔関連イベント1〕

基町高層アパート見学会

〔関連イベント2〕

もとまちカフェ

40

32

25

21

11

4



シンポジウム会場（広島市立基町小学校体育館）



基町高層アパート見学会（基町高層アパート屋上）

## 「基町における応急住宅・不法住宅の成立とその後」

発表者＝石丸紀興

### 基町の歴史と現在

皆さんこんにちは。石丸でございます。このような会にお招きいただいて光榮です。基町のことを語るうとと思うと膨大な内容があるはずですが、今日は戦争以前のことは適当に省き、それから再開発のことについては時間がなくて触れられませんので、私は戦後の再開発に至る過程について、可能な範囲でお話ししたいと思います。

まずいきなり結論というか、皆さんを挑発してしまいますが、いつの時代においても基町は広島にとって欠かせない存在であったということは皆さんも同意されるとしても、歴史の流れを見てみると、現代は最も基町の影が薄くなっているのではないか。いかがでしょうか。そんなことはないという方には否定していただいて、色々な事例の紹介や問題提起をしていただければと思います。コミュニケーション再生やアートイベントとして色々な動きが始まっています。もちろん評価すべきことなので、希望は見いだせるのですが、しかし基町を単なる利用の場所として考えている関係者も少なくないよう見えます。基町はもつと魅力的な場所であり、魂を入れ込んで一緒に生きていく、広島にとって重要な場所であることを忘れてはいませんか、と。単なる施

設をつくる場所だという捉え方、これが基町の影を薄くしている、というのが私の直観です。

さて、私の話を整理すると、次の11くらいのテーマがあります。

- ・ 基町の被爆はどのようであつたか
- ・ 戦後の復興計画でなぜ大面積の中央公園を計画したのか
- ・ この中央公園になぜ応急住宅を建設したのか
- ・ 河岸になぜ不法住宅が建設され始めたか
- ・ 昭和31年12月、なぜ中央公園を縮小し、一部を住宅地として公認したのか（一団地の住宅経営地区指定）
- ・ なぜこの応急住宅を長期放置、老朽化に任せたのか
- ・ なぜ不法住宅の建設を放置、見逃したのか
- ・ ここ基町ではどのような生活が繰り広げられたか
- ・ 基町でなぜ再開発の必要性が認識されたか
- ・ 応急住宅地と不法住宅地で異なる手法が検討されたのではないか
- ・ 不法住宅を再開発の枠組みに組み込んだのはなぜか、どのような政策的な判断があつたか

こんなことはすべて分かつてているという方、いらっしゃいますか？ そういう方がおられたらもう私の役割はないのですが（笑）、ではこのまま続けさせていただきます。なお、話の前に用語の確認として、基町という言葉は色々な範囲で使われますが、中にいくつかの地区があるということですね【図版1】。住居表示での基町全体、漠然とした基町住宅

地+中央公園という意味、基町高層住宅地区だけを

指す場合もあります。それと基町地区再開発事業と寿園の再開発地区部分も含めている。あまり厳密に区分する必要はないですが、場面によって、基町という地域が異なる範囲になつていることに注意する必要があります。

### 地区名の整理

- 基町：住居表示基町（河岸緑地） 旧広島城郭
- 基町地区再開発事業地区：基町住宅地区（改良事業地区）
  - +長寿園住宅地区（改良事業地区）
- 基町地区：住宅地+中央公園（+官庁街+民間施設）
- 基町住宅地区：高層住宅地区（改良住宅+公営住宅）
  - +中層住宅地区+その他共益施設
- かつての基町住宅地区：現在の基町住宅地+相生通り地区
- 基町高層住宅地区 基町住宅地区から中層住宅地区を除いた地区
- 長寿園住宅地区 高層住宅地区（改良住宅）
- その他県営公営住宅+公団賃貸住宅+公社分譲住宅 その他公益施設

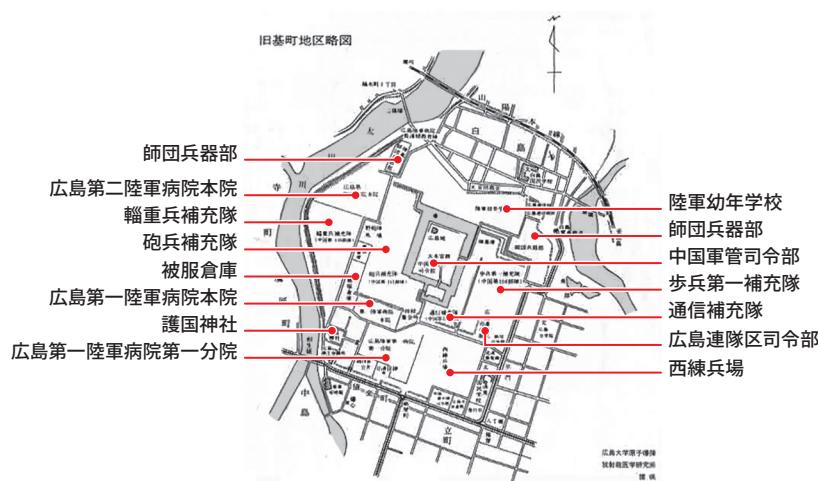
図版1：話者発表スライドより再作図

## 被爆から復興へ

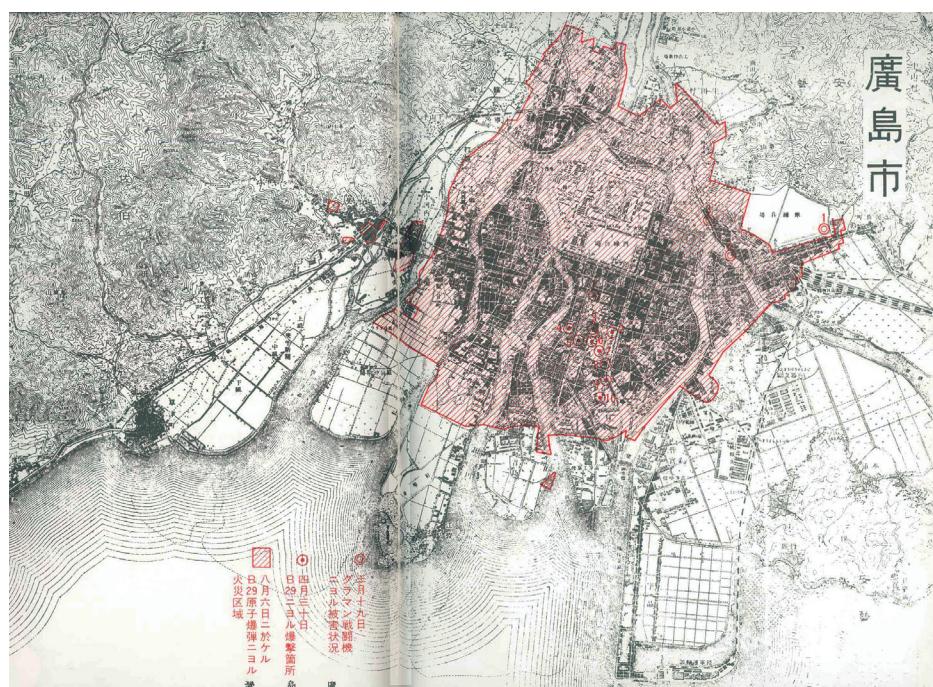
さて、前史としまして、これはもうよくご存じのよう、基町は城下町の中枢であつたわけです。真ん中のお城の部分はまさに枢要の地ということで、これが基町という名称にも繋がつてきます。そして明治の初期から軍事施設が立地していった。特に日清・日露、それから太平洋戦争期に相当な施設が集中していきました【図版2】。そして被爆ということになります。この地図【図版3】は薄く赤で塗つてあります。爆心地から1・5キロくらいのところまでは全壊全焼地区ですから、非常に大きな被害を受けたことは間違ありません。この写真【図版4】は基町ではなくて平和公園のほうに向いていますが、鉄筋コンクリート以外の建物は皆無ですし、鉄筋コンクリートも半ば燃えている。基町もこういう壊滅状態であったことになります【図版5】。

問題はここから始まります。戦後の復興でなぜ大面積の中央公園を計画したのか。これは色んな説明があります。軍都広島には600ヘクタールの膨大な軍用地があつた、西練兵場辺りは特に大きな面積の軍用地があるから、それをとりあえず公園用地にしましよう、というのは多くの復興関係者の発想です。原爆市長と言っている濱井信三さんも、そういう考え方が納得できる、だから公園をつくったのだと語られています。また、当時の広島県の都市計画課の課長、竹重貞蔵さんという方ですが、その方が都市計画広島地方委員会（昭和21年10月19日）で、この公園計画についてどう説明したかと言うと、

ロンドンやパリやニューヨークといった海外の都市において公園の比率がいかに高いかと言つて、そういう都市が理想であり、まさに中央公園は公園比率を確保するのに適している、そう述べています。私はもっと決定的な要因は、「戦災地復興計画基本方針」というものにあつたと考えています。これ



図版2：基町軍事施設分布図



図版3：広島市戦災地図

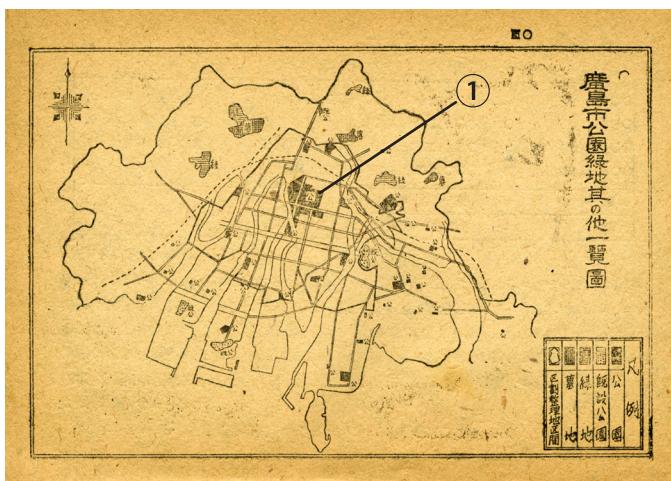
によって全国の戦災都市に対して指示がいくのです。が、この基本方針が閣議決定されたのが昭和20年の12月30日、これは驚くべきことだと思われないでしょうか。JICA(国際協力機構)の研修やUNITAR(国連訓練調査研究所)のワークショップに参加した中近東の人などに、日本は戦争に負けて4ヶ月余りで



図版 5：被爆後の基町地区



図版 4：被爆後の市中心部



図版 6：広島市公園緑地その他一覧図に加筆

政府が復興計画の基本方針を決めたと言うと、みんなびっくりするんです。すなわち当時それなりに時代を読んで、自分たちの役割を果たそうと行動した人たちがいた。その基本方針はインターネットにすべて載っていますが、その中に緑地に関する項目があります。「公園運動場、公園道路その他の緑地は都市、聚落の性格および土地利用計画に応じ系統的に配置せらるること」、「緑地の総面積は市街地面積の10%以上を目指として整備せらるること」。ですから10%を公園用地に確保しなさい、これで戦後の全国の復興計画が動いたわけです。もちろん目途なので、絶対ということではないのでしょうか、10%

というのは大変な比率です。それで広島も一所懸命、できるところを公園にしようということで、東公園や中島公園、後に平和公園になるところも確保したり、それだけでは足りないということで、軍用地も候補にした。政府の了解を得て指定したのかどうか正確ではなくて、どさくさに紛れて候補に加えてしまつたという感じもしないではないのですが、ともかくそういう大きな面積を公園の用地として確保しようとしたわけです。それでできた計画図がこれです【図版6】。(1)が中央公園で、70ヘクタール。現在の面積と違いますね。現在はこの6割くらいになっていますが、とにかくこれが復興計画の始まりであるわけです。

**住宅供給の必要性**

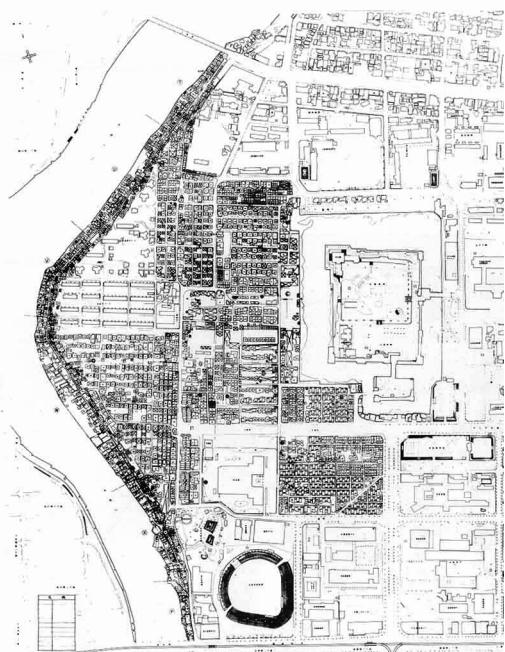
ところがですね、当時、戦地や疎開先から帰ってきて住むところがない人たち、それから広島に集まつてくる人たち、そういう住宅需要が猛烈にあつた。とにかく住宅を供給しなければならない。昭和20年はまだ無理だつたようですが、応急的な市営住宅として、21年から建てていこうということになりました。とにかく住宅を供給しなければならない。昭和21年はまだ無理だつたようですが、応急的な市営住宅として、22年から建てていこうということになりました。それで建てられる場所はどこかと考えたとき、当時の人たちにすぐに目に付いたのが軍用地だったわけです。だから一方では公園として指定しておきながら、そこに膨大な住宅の建設を始めた。戸数がどうだつたとか、その辺のことは詳しく喋りません。一時使用の民間の住宅もあったということです。そしてこれは後でまた述べますが、こうした

公的な住宅建設と並行して、土手沿いに公的ではない住宅が建てられていきました【図版7】。この地図【図版8】では、公的な住宅もある程度時間が経つて、それぞれ増築したり建て替えたりしたのもあると思いますが、かなりかたちが崩れていっている。川沿いに不法住宅が集中している状況も見て取れます。

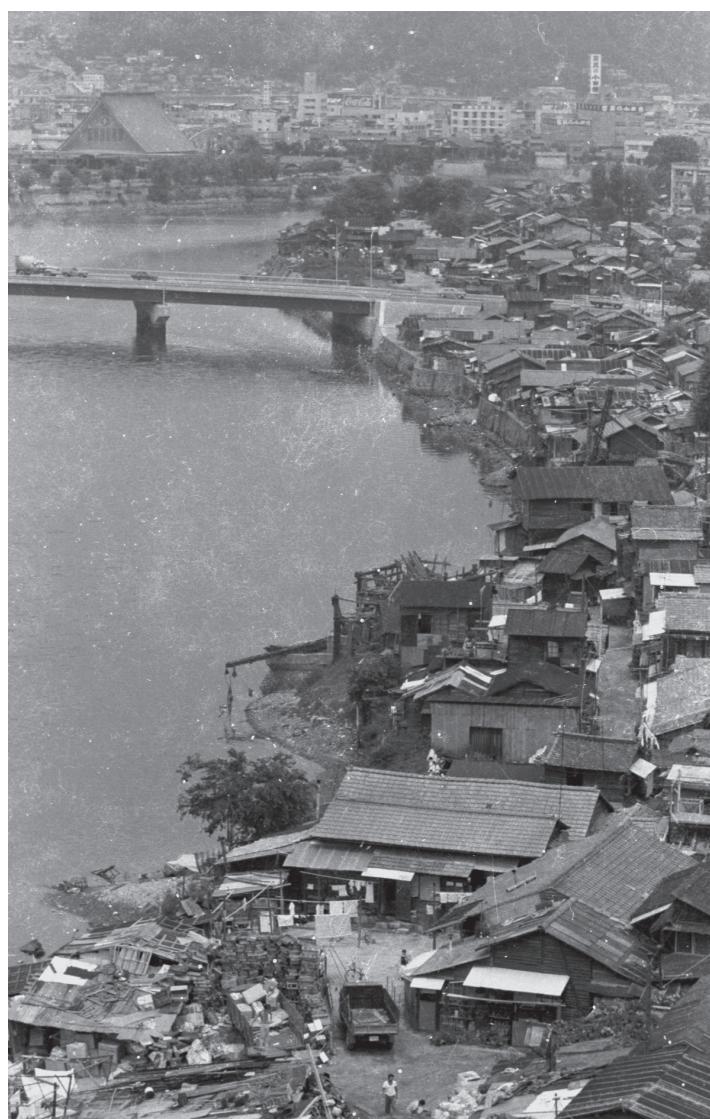
この不法住宅をなぜ放置したか。撤去どころではなかつたということでしょう。市内全体での復興事業が大変でしたし、当時河岸にはここだけではなくて多くの復興住宅が立地していた。ですからとりあえず昭和41年から撤去が始められたのも、駅前の不法住宅だったわけです。そういう意味で、基町は当分のあいだ撤去の手が着かず、その間どんどん老朽化していきました。

そして昭和32年の12月、中央公園を縮小し、そこを一団地の住宅地区として認めるということになった。私の見解ですが、これは100メートル道路の問題と深く関係しています。どういうことが説明しますと、昭和30年に戦後3回目の市長選挙がありまです。広島の復興において濱井市長の功績がすごいものだということは誰しも認めるところですが、3回目において、その濱井さんに対抗するかたちで渡辺忠雄さんという方が立候補します。その渡辺さんが、100メートル道路を半分にして住宅を建てる、そういう公約を掲げて、少しの差ですが渡辺さんのほうが当選した。つまり当時、100メートル道路に反対する意見が多かつたんですね。大田洋子

図版8：基町地区状況図（昭和41年頃）



図版8：基町地区状況図



図版7：相生通り写真

著「夕凧の街と人と」（講談社、1952年、廃刊後、三一書房、1978年覆刻）という小説を読んでみると、昭和28年頃の状況が書いてあるなかで、自分たちが住むところもないのにあんな大きな道路を造つてどうするのかと、建設を批判する状況が描かれています。ですからそうした流れに乗つて、渡辺さんは当選したわけです。

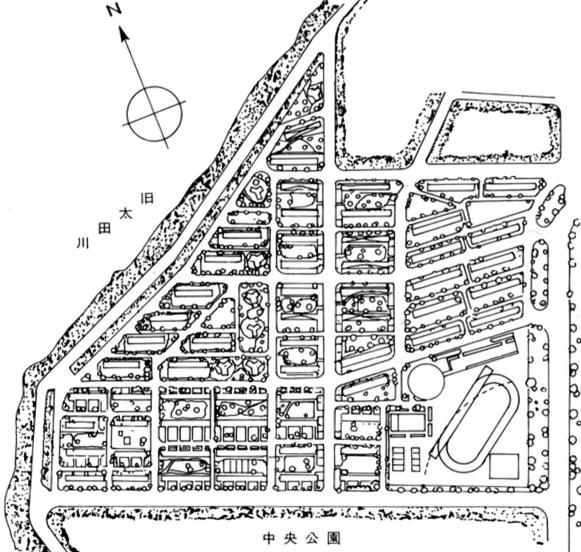
しかし一方で、広島市の建設局の人たちは、そんなことを今からやつたら大混乱になると、渡辺さんを説得するんです。いわば渡辺さんが当選したのはポピュリズムであつて、それをそのまま実施するのは広島市にとつても渡辺さんにとつてもよくないといふのをかけて説得した建設局長がいた。今、大統領になろうとしているトランプさんの、人種や宗教での差別発言が問題になつていますね。誰か近い人が忠言して方針を変えさせないと大変なことになると思うのですが、当時の広島市にはそれをした人がいて、結果的に100メートル道路に住宅を建てるることは中止になつた。ただ、どこかでそれに代わる住宅地を確保しないといけない。私の解釈では、そういうふうにして方針が決まつていつたのではないかということです。

昭和30年に渡辺市長が当選し、翌31年10月の都市計画広島地方審議会、この段階で「団地住宅経営」を計画決定します。決定した理由は、戦後に軍用地に建てた住宅をどこかへ移そうとしても行き場所がない、公園の面積を減らして永続的に住宅地を確保するしかない、ということです。面積はもちろん中

央公園全体ではないですが、住宅地が約13ヘクタール。中央公園の予定面積は、これを差し引いて約42ヘクタールになりました。そこでまずは昭和31年度から、4階建て5階建ての市営・県営の中層公営住宅を建て始めます【図版9】。ただ、それで進めようとしたところ、中層では予定の全戸を収容できないうことが分かつて、ある段階でストップさせてしまう。で、どうするかということになつたときに、いいよ再開発がテーマとなつてきます。

そこで高層アパートの話になるわけですが、やや横道に逸れて、渡辺市長のことにもう少しだけ触れておきます。100メートル道路をめぐる公約には問題があつたわけですが、けつこう色んな仕事もさ

れているんです。昭和30年に原爆資料館を開館されたり、100メートル道路の供木・献木運動ということで、今の緑のほとんどは渡辺市長時代に植えられました。あまりにも全体計画なしに、無計画に植えたところもありますが、埃っぽくて殺風景だった濱井時代の100メートル道路を渡辺時代に緑化し、昭和33年には広島復興大博覧会の開催もさせていました。市民球場の完成や天守閣の再建も渡辺時代です。それだけの業績もある方なんですね。



図版9：基町中層住宅建替計画図

## 原爆スラムでの暮らし

さて、まだ問題は色々と残っていますが、なぜ相生通りにおける不法住宅の建設が放置・見逃されたのか。これについて明確な一つの答えは出せませんが、広島大学の卒業生で千葉桂司さん、矢野正和さん、岩田悦次さんたちが雑誌に発表していますし（特集「不法占拠——広島原爆スラム調査報告」『都市住宅』1973年6月号）、私も書いています（石丸紀興「基町相生通りの出現と消滅」「基町高層住宅における空間と文化」『広島市新史都市文化編』広島市、1983年）。また、最近も原爆スラムの内容を詳しく振り返っています（石丸紀興・千葉桂司・矢野正和・山下和也「基町／相生通り（通常「原爆スラム」）調査を回想する〈前編〉」『広島市公文書館紀要』第29号、2016年）、こういったものを見ていただけれど思います。

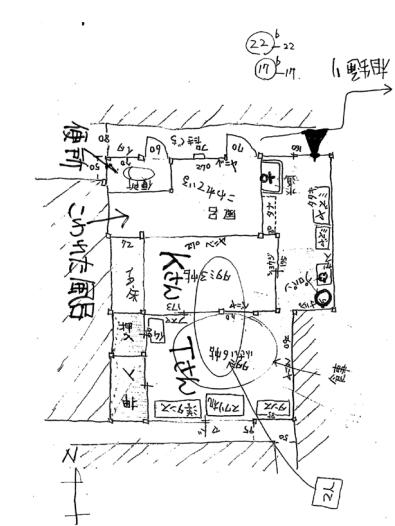
まあ、色々な理由が考えられます。復興事業・区画整理事業に伴う混乱した状態があつて、換地をもらつても動かなかつた人もいますし、当時は土地を持つている人よりも借地借家の人が多かつたわけで

すが、生活費が逼迫していて、家賃を払う借家に住むことができなかつたような人たちが、非常に安く、ある意味では生活しやすいところとして、相生通りと言われていた地区に流れ込んできた。平和公園も整備されていくのですが、それまで公園の中に住んでいた人たちも行き場がなくなつて、基町の河岸に流れ込んでくる。私の解釈ですが、行政の対応もある意味ではそんなに厳しく取り締まつていないと

生通りにおける不法住宅の建設が放置・見逃されたのか。これについて明確な一つの答えは出せませんが、広島大学の卒業生で千葉桂司さん、矢野正和さん、岩田悦次さんたちが雑誌に発表していますし（特集「不法占拠——広島原爆スラム調査報告」『都市住宅』1973年6月号）、私も書いています（石

丸紀興「基町相生通りの出現と消滅」「基町高層住宅における空間と文化」『広島市新史都市文化編』広島市、1983年）。また、最近も原爆スラムの内容を詳しく振り返っています（石丸紀興・千葉桂司・矢野正和・山下和也「基町／相生通り（通常「原爆スラム」）調査を回想する〈前編〉」『広島市公文書館紀要』第29号、2016年）、こういったものを見ていただけれど思います。

ただ、結果として相生通りに多くの人たちが流れ込んでいく。それが後々、原爆スラムという名前が付けられたりですね、昭和40年代に大きな問題になつてくるわけです。政府の直接的な支援によつて再開発に持ち込もうとか、色んなことが考えられたのですが、簡単にはいかない。結果的には不法住宅の指定をして、そこに住宅地区改良法が適用されました。公営住宅だと、いわゆる人居条件があつて抽選があつてということになりますが、改良住宅の制度では、もともと住んでいた人たちに一定の権利がある。完全に全世帯が保障されるわけではないにしても、新しい住宅に住み替える権利が存続していくことになります。



図版10：相生通りにおける事例—お婆さん2人の家

それで先ほど紹介したとおり、当時の広島大学の学生がこの川沿いの住宅地の詳しい調査をしていました、これは読んでもらうと本当に面白いと思いません。私は直接参加していませんが、同じ研究室で調査していたのを横目で見ていました。お婆さんが二人で隣り合つて住んでいるとか【図版10】、当時ぎりぎりのなかで、みんなで寄り添つて暮らしていた。「相生通りの人たちは持ち前の自立心、たくましさ、

それで昭和46年度から住宅の除却が始まりました、52年に終わるまで、少しづつ住戸が移されていました。時間が長くなつてしまつたので後は省きましたが、河岸に住んでいる人たちも、ぜひとも住宅改良法に適用してほしいということで、建設省の人たちが来たときに陳情したりして、運動で勝ち取つたという面もあります。

ともかく基町の行方を決めた大きなポイントは、まず公園として計画されたこと、そしてその一部を住宅用地に転換したこと、それが今繋がっている。もつと大きな面積を転換すればよかつたという意見もあるかもしれません、いずれにしても公園用地を削つて住宅地にしたのだということですね。戦災復興の土地区画整理の区域から基町地区を外して、別の事業手法によつて住宅地を再開発した。都市計画的な観点でドライに言いますと、基町の再開発とは、土地利用を大転換する事業であつたというのが

### 基町の再開発の意味

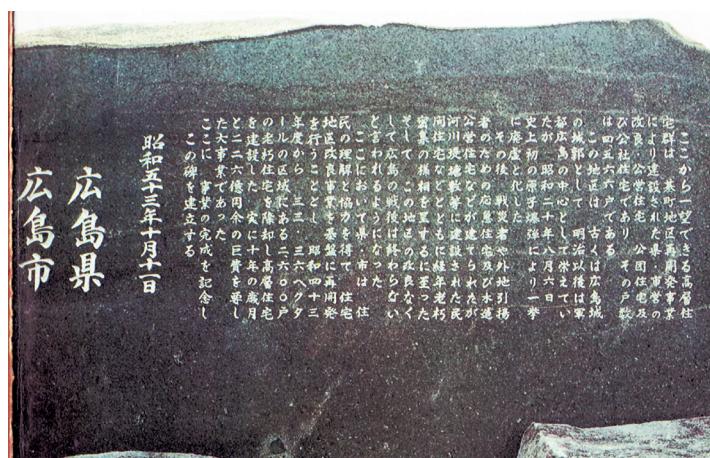


図版 11：基町大火

私の説です。

再開発の具体的な条件については、できれば藤本さんにお話しいただきたいです。市から最初に要請されたとき、「8・1ヘクタールに3000戸、12000人が入るように建ててください」と言われたのだと思いますが、それでよく設計できると判断されたなど……。今日の私の話としては、再開発の計画条件がどういうふうに出てきたかということを、大きな流れで申し上げたつもりです。

今、お城のお堀端に石碑が立っています（基町地区再開発事業完成記念碑）【図版12】。この再開発は



図版 12：基町地区再開発事業完成記念碑（裏面）

広島の戦後を終わらせるためにやつたのだという、かなり長い文章が彫られているのですが、これが現在、字が潰れていて読みません。なんとか字が鮮明に見えるようにしていただきたいところです。果たして戦後は終わったのか、これは皆さんと議論したいと思います。

最後にまとめます。かつて基町は、軍都の枢要な地、とりわけ大本営、中国軍管区司令部、第5師団の派遣地であつた。そして被爆後には、住宅不足時代に重要な住宅供給をした場所であり、社会矛盾の次善解決装置としてのスラム街が形成された場所であつた。そしてそれらを総入れ替えする、全国の都市関係者も目を見張る壮大な再開発が進められた場所であると。そういう希有な歴史を持つていて基町のあり方を考えていかなければならぬのではないか。被爆100周年もいざれ来ますが、基町の方々、特に中央公園のあり方など、方針が定まつていらない。何をしているんだと思います。そんなことを言うなど叱られるかもしれません、一応そのことを申し上げて、私の発表を終わらせていただきます。ありがとうございました。

## 「基町高層アパートの計画」

発表者＝藤本昌也

### 基町高層アパート誕生物語

藤本でございます。どうぞよろしくお願ひいたします。30分という時間なので余計なことを喋るとすぐ経ってしまいますね。今日の主人公である大高正人という建築家が、基町の高層アパートの計画を依頼されて以来、施工も含めて約10年間仕事が続いたわけですが、どういう考え方、どういう手法で解決に向かっていったのか、その辺りの基町高層アパート誕生物語を紹介したいと思います。先ほど石丸先生から問い合わせがありましたら、後で松隈先生の司会でクロストークすることになりますので、応答はそのときにするのがよいかと思います。

まず高層アパートの建設の経緯として、石丸先生のお話と重なりますが、大高正人がこの計画を受け前、設計条件はこうだと言われるまでの経緯を少しお話ししておきます。広島平和記念都市建設法というものが1949年にできています。石丸先生のお話だと、昭和20年にできたのは、日本全体で戦災に遭つて復興しないといけないところの基本方針でした。ただ、私がその当時聞いたのは、やはり広島は一般的な日本の都市の復興とはわけが違う。大変な被害を受けているので、特別な法律を作つて考えないといけないということでした。それが主に次のような内容です。

- ・ 平和のシンボルとして広島平和記念都市を建設する

る

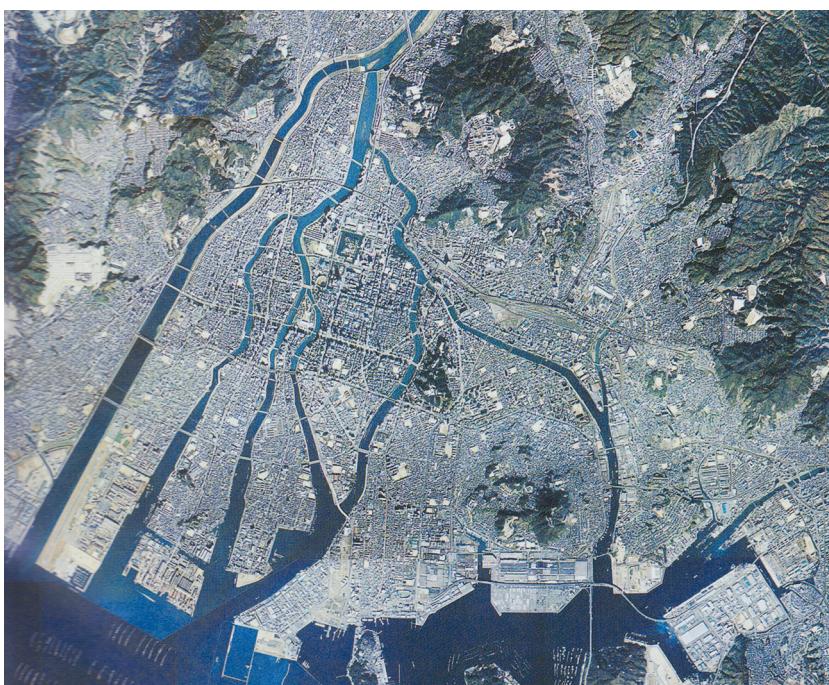
- ・ 平和都市にふさわしい文化施設をつくる

・ 国と地方公共団体はできるだけの援助を与える

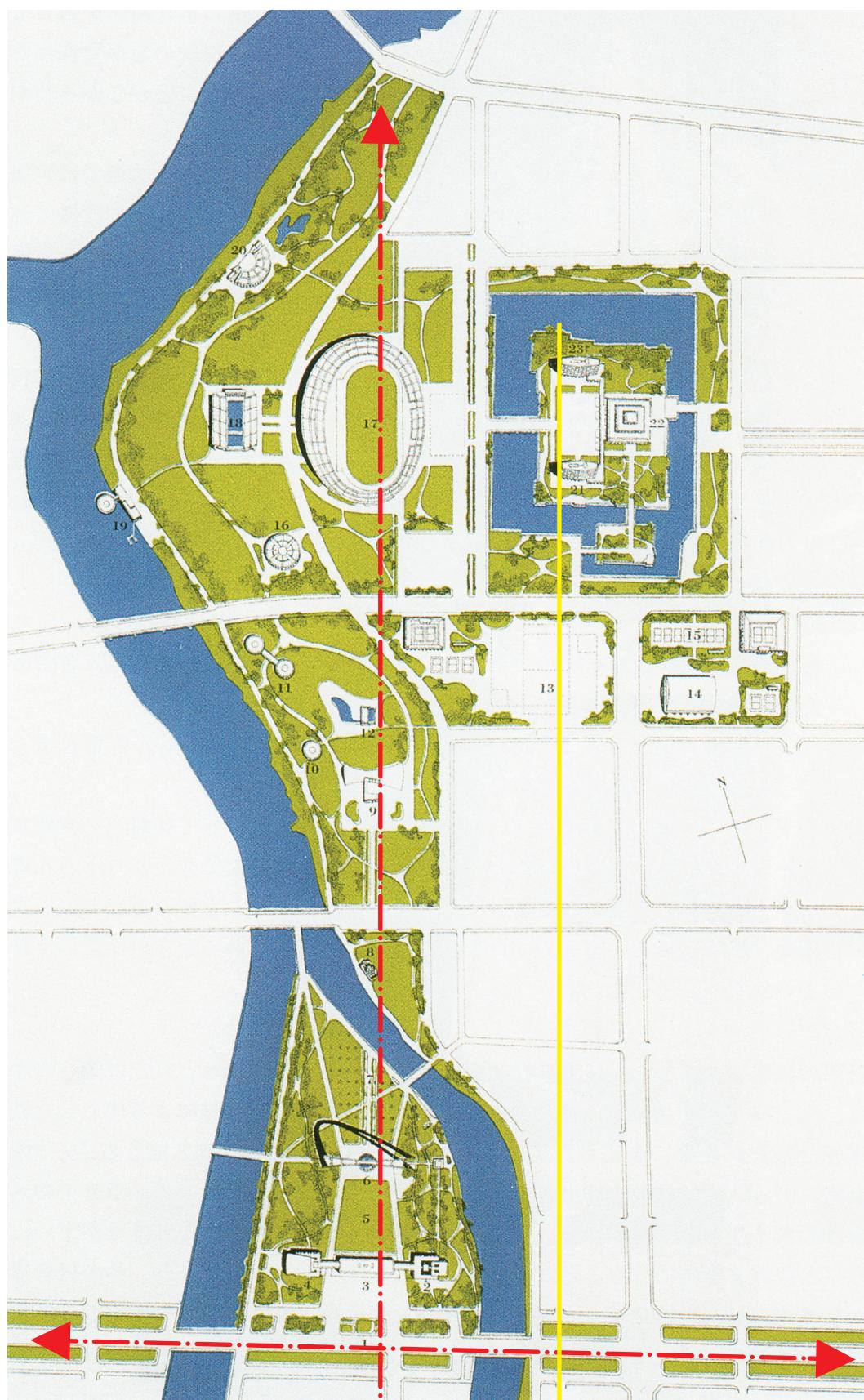
- ・ 必要があれば国有財産を無償で与える

市長および市民は平和都市を建設する義務がある2番目の「平和都市にふさわしい文化施設をつくる」というところは、おそらく丹下健三さんが設計コンペで選ばれた平和記念公園の建設が、その中心になつたのだと思います。

この地図（写真に差し替え）【図版13】は真ん中が基町ですが、見ていただきたいのは、広島は6つの川が流れています。山に囲まれている、典型的なふるさととしての条件を揃えている素晴らしい自然環境に恵まれた街ということです。確かに公園の緑地が少ないというのは日本中そうですが、この川を公共のオープンスペースとして捉えた場合、広島のお話と重なりますが、大高正人がこの計画を受け前、設計条件はこうだと言われるまでの経緯を少しお話ししておきます。広島平和記念都市建設法となるお城の周辺という、その計画ができることがなつたわけです。



図版 13



图版 14

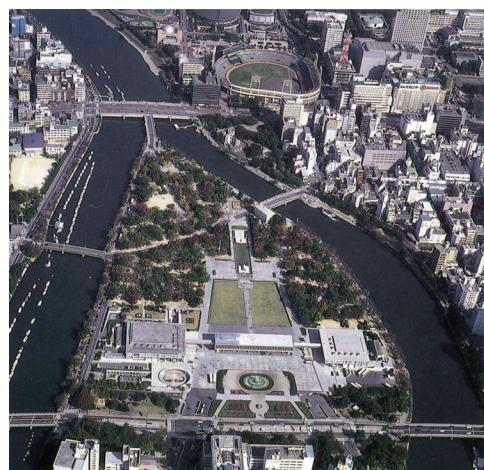
これが丹下さんによる平和記念公園の計画ですね【図版14】。1949年に法律ができたのと同じ年、市がここに公園を計画して、設計コンペで丹下さんが選ばれた。ただ、ここで丹下さんは、公園だけではなくて、100メートル道路の東西の軸と原爆ドームに伸びる南北の軸という十字の軸を基本に、都市の骨格をつくる提案をされているんです。ややかたちを変えましたが、基本的にこれが実現しました【図版15】。

この写真【図版16】は、木造の住宅地に替わってコンクリートの中層住宅の建設が始まつた頃の空撮です。我々はこの状態のときに仕事を受けました。中層の東側、高層アパートが建つところはまだ木造の復興住宅が建つていて、南のほうの中央公園になるところも建つていて。そこをぜんぶクリアランスして、もともと住んでいた人たち、さらにいわゆる不法占拠で河川敷にいた人たち、強制撤去された人たちに、改良住宅法を適用して新しい住宅に入つてもらう。残つたところは公園にする。広島の戦後はこれが終わらないと終わつたとは言えないという思いで、市の関係者が大高さんに設計の協力を求めたわけです。

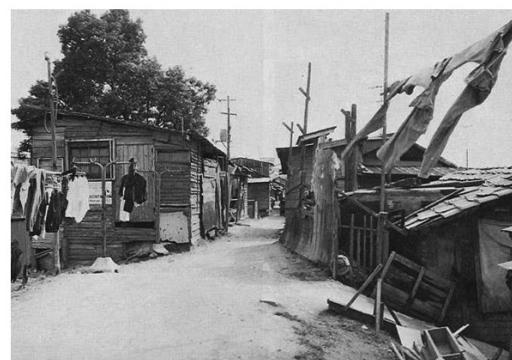
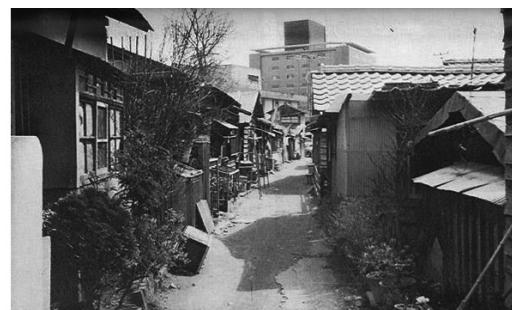
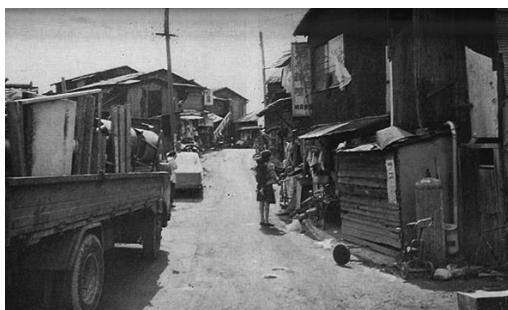
この写真【図版17】が、我々が依頼を受けた頃の河川敷の様子です。石丸先生が紹介されたとおり、広島大学の千葉桂司さんがこの中の生活の実態を綿密に調べて、『都市住宅』で発表されました。確かに建築は大変な状態ですが、魅力的な路地があつて、子供たちやお年寄りも安心できるヒューマンな生活



図版 16



図版 15



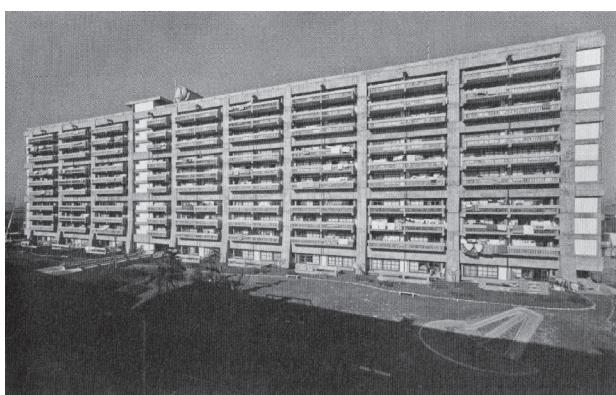
図版 17

空間だった。通常スラムと言われるような場所ですが、普通の区画整理だと、なかなかこうはならない。

そういう意味で、私は『都市住宅』が基町アパートの特集をするのなら、その前にまず千葉さんという人があそこの調査をしている、それをぜひ紹介してくださいと頼んで、あの号ができたんです。

### 大高正人の思想

そして大高さんが登場することになります。それまでは普通の一団地として進めていましたが、高層の場合は、住宅地区改良法によって河川敷の方々も含めてぜんぶ事業として救済していく。1968年から69年の事業の策定の時点では、再開発対象地区が33・36ヘクタールで、高層住宅用地が9・51ヘクタール、公園緑地が21・69ヘクタール、道路が2・16ヘクタールで計画されています【図版18】。除却不良住宅は約2600戸。そのうち約600戸は県が受けとめて、残りの2000戸弱を改良住宅として市が対応する。ただし、それに加えて公営住宅が約1000戸。これは住宅政策として、地域の人たちだけでそこを使うのではなく、市民全体に配慮して、一般公募で入居できる住宅も1／3はつくる計画とした。ですからそれも含めて合計で3008戸を高層住宅でつくつてほしいということでした。それここで特徴的なのは、住戸だけではなくて、幼稚園・保育園・児童館・店舗・医療施設・消防署など、もともとあつた基本的な施設はぜんぶ再建し、新しく小学校も入れる。つまり一つの街の



図版 19



図版 18

なぜ大高さんが頼まれたのか簡単に申し上げます

が、これは晴海高層アパートといつて、1958年、大高さんが前川事務所にいたときに担当した公団の集合住宅です【図版19】。これが公団で初めての高層アパートで、基町の原型になるような提案を含んだ計画でした。アパートの1階部分はピロティで空間が抜けていたのですが、そこを公団に「もったいないからぜんぶ住宅を詰めてくれ」と言われて、大高さんも大変悔しい思いをした。だから基町ではぜんぶ足もとが空いてますよね。

こちらは坂出の人工土地です【図版20】。1966年から20年間かかりました。これも商店街の裏側は、老朽化した木造住宅が密集したスラムになっていた。人工土地という手法で、商店街も含めて全体を立体的に空間再編して解決するという提案をしたんです。6mくらいの高さに盤を造って、住宅をその上に載せて、下に商店街や駐車場といった都市的な施設を入れる。あまり固定的に住宅団地をつくると街の発展を阻害することになるので、住宅と都市を立体的に分けて、将来、都市が拡大・発展

復興・計画ですよね。それを立体的空間として解いてほしいということで始まるんです。

実は高層アパートを公営住宅で建てるのは、全国で広島の基町が最初の一つなんです。もう一つ川崎にもあって、それは大谷幸夫先生という、丹下先生の下で平和公園の計画にも参加された先生がいます

したときに色んなかたちで対応できるようにした。

ですから高層住宅の実績もあって、街のことも分かつて建築のあり様を見つけてくれる建築家として、大高さんが依頼されたわけです。高層住宅は公団がわずかに先行して建てていましたが、8・1ヘクタールに3000戸という規模で、これだけの都市施設を内蔵するというのは前例がない。しかも当時の公団はせいぜい14階建てなので、本当にきちんと居住性を確保した高層団地ができるのか。当然これは建築家が解決しないといけない難しい課題です。気持ちとして半分は非常に重い気持ちで引き受けられた。

大高さんが常に言っていたことですが、建築家はなんのためにいるのか、建築家は人々の幸せのため

にいる、それしかないと。デザインが上手か下手かというよりも、その理念、志をちゃんと持っているかどうか。そこが大高さんの建築家としての最大の特徴です。基町の場合でも、大高さんとしては、人々がとてつもない密度で陽も当たらないようなコンクリートの箱に詰め込まれることは絶対避けたい。それで建築家としての苦闘が始まるわけです。我々も大高さんのアイデアを受けて、図面を描いた。おそらく半年もかからないで構想を出しています。

それともう一つ、大高さんの意識としては、そこに住む人たちの幸せのための空間ができるかと同時に、公園があり川がありお城があるという、広島市民の貴重な共有財産である都市空間と、ちゃんと折り合いを付けて高層団地が建てられるかどうか。も

のすごく巨大な団地がバーンとできて、周りの空間を威圧するようなことはできない。街に対しても謙虚に建て、なおかつ人々に本当に幸せな感じで住んでもらえるか。それを建築の専門家として提供できるか。そういう鬱いだつたんです。

これは東京の豊島五丁目団地で、当時1000戸や2000戸という規模で建てられていました高層団地の一般解です【図版21】。これも見に行つて、大高さんはこれじやあ生活感を欠いた無機質な空間で駄目だということで、基町の建ち方を考えたわけです。

#### 基町高層アパートの設計手法

この建物のポイントは4つあります。



図版 20

#### ①住棟配置手法

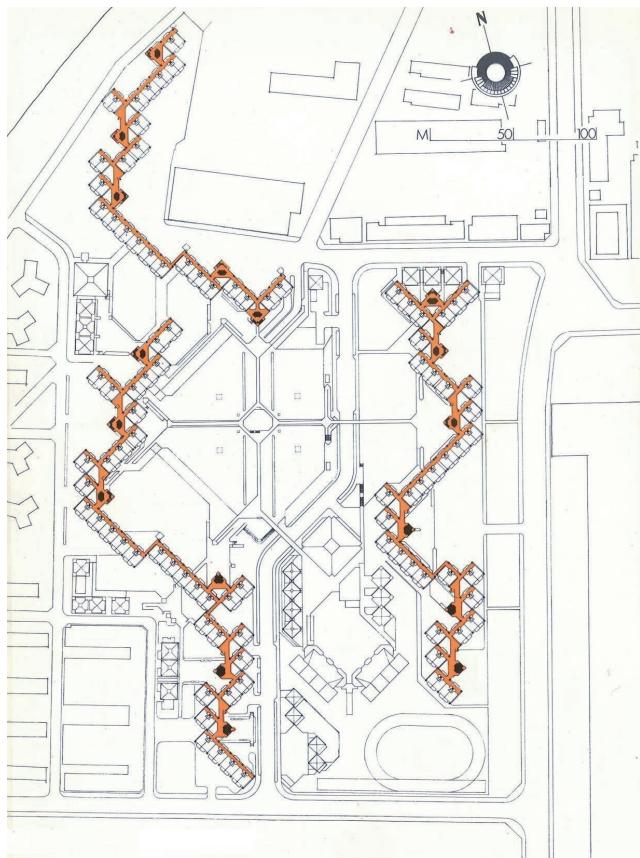
まず屏風型であること。住棟が都市空間を内包して「く」の字型にギザギザになっている。さつきの

公団の建物は巨大なスケールの威圧的な壁となつて立ち並んでいる。各住戸も東向きか西向きになつて、陽の光が午前か午後のどちらかしか当たらぬ。基町はそうではなくて、午前も午後も一応当たるよう

に南東向きと南西向きにした。それとともに、お互いの住棟が鼻を突き合わせるような、対面にならないうようにしている。最初の案はあまり複雑にしないで、おとなしく南東と南西向きで、真ん中に学校を置きました。ただ、学校が周りから見られるのが嫌だというので南側に持つていき、最終案になつて



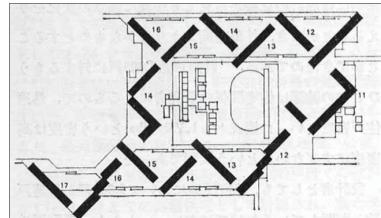
図版 21



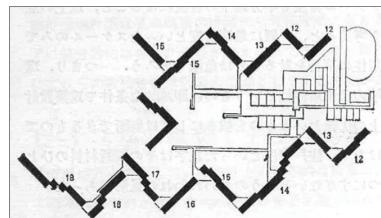
図版 24

●全体計画の変遷（1968-1969年）

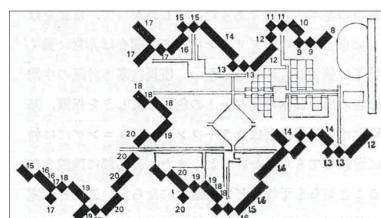
1. 中間報告案（学校中央案）



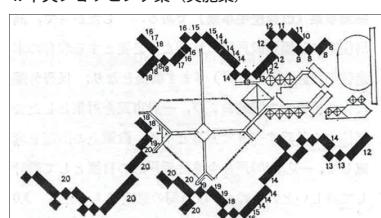
2. 基本構想案（学校南案）



3. 特定街区案（階数変更案）



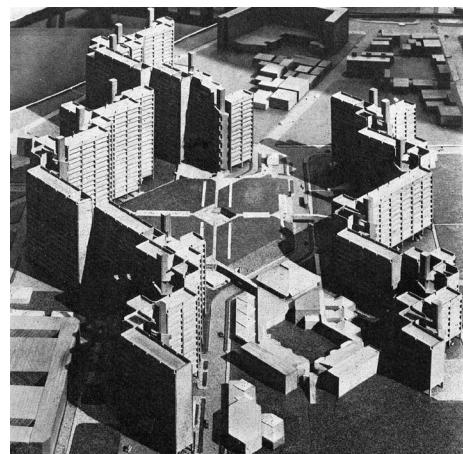
4. 中央ショッピング案（実施案）



図版 22



図版 25



図版 23

いつたわけです【図版22】。ヴォリュームを細かく分けることで、周りから見たときに威圧的にならない、適度に分節され、群造形になつています【図版23】。

色が付いている部分が外廊下ですが【図版24】、これもギザギザになつて続していく。多少迷路的な雰囲気もありますが、これはもともとのスラムにあつた路地のイメージなんです。つまりヒューマンなスケールの都市空間が空中にある。実際に居住者の方が植木を置いたりして、下町の路地のようになっています【図版25】。

もう一つの特徴はピロティですね。大高さんにとつては、晴海のアパートでできなかつたこともあつて、基町でやりたいという思いはすごく強かつた。市のほう色々考えてくれて、住宅のほうに影響がないように、予算的な工夫をしてもらいました。このピロティによつて、周辺の人たちにとつてもこの中を通り抜けられるとか、開放的な街になる。団地づくりではなく、街をつくっているということです【図版26】。

それと行つてみればすぐ分かりますが、鉄骨は1階おきになつていて、その間はコンクリートのスラブだけが入つている【図版27】。だから間のスラブを取つ払うと一つの大きな空間になる。構造的にそれで大丈夫なよう建ててるので、スケルトンで色々な生活形式に対応ができるようになつています。

## ②施設配置手法



図版 27



図版 26



図版 29



図版 28

真ん中にオープンスペースを取つて、都市的サー

ビス施設を配置するという提案をしていてます【図版28】。そして人工地盤をつくり、下に店舗を入れている【図版29】。それまであつたお店の方々で、入りたい方々にはぜんぶ入つてもらつた。外周は築山をつくり、丘の上の公園のような感じになつています【図版30】。

### ③団地内の動線計画手法

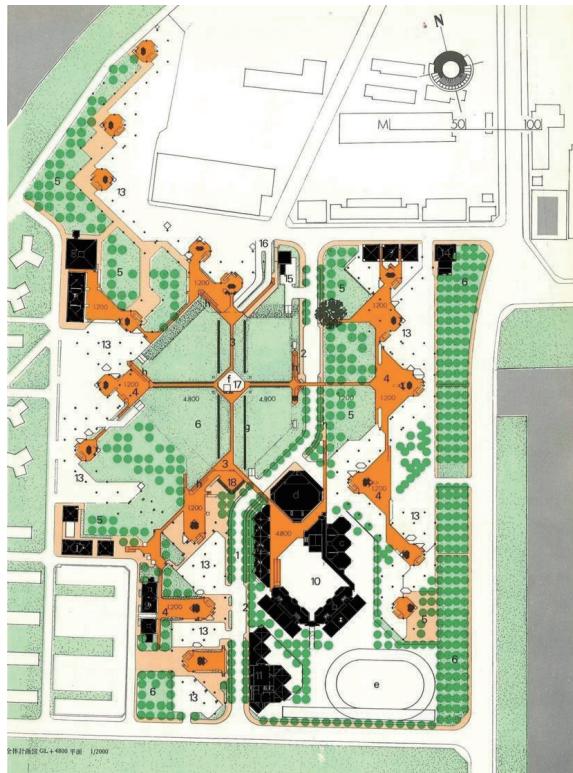
坂出と似た考え方ですが、店舗群の上は人工地盤にすることで、子供たちはその人工地盤上の公園を通つて、車に出会わないので学校に行けるようになつています。これはグラウンドレベルの図面で【図版31】、オレンジのところは1・2mの高さで、空間が抜けています。

### 未来に向けた空間づくり

建設後の歩みについては触れる時間がなくなつてしましましたが、例の神戸の震災の後には、市が鉄骨の耐震診断をして、幸いに耐震改修しないといけないということはなかつた。それと2006年から住戸改善もしています【図版34】、【図版35】、【図版36】。この計画が始まったのが68年で、当時の公営住宅の住戸の規模はものすごく小さいんですね。だから3000戸というのは今の標準だと1500戸分なんですね。市は着々と住戸改善を進めていて、2018年には完了する予定です。もう今は最初にマスタープランですべてを決定するという時代ではなくて、時間軸を入れて、時間とともに変えてい

### ④屋上空間の整備手法

屋上はみんなの庭として計画しています【図版32】、【図版33】。近代建築はフラットな屋根が多いですが、設備の機械が載つていたり、あまり生活感がなくて、景観としても美しくない。大高さんはそう頻りに言つていました。基町では階段状の屋上が約1万m<sup>2</sup>できるので、その空間をちゃんと使って長く共有できる庭としたい。少し土も入れて、園芸ができるような場所をつくつたらどうかと提案して、承認されたわけです。最初は屋上すべてを繋げてしまひたかったのですが、予算的にそうもいかなくて、それぞれ3000m<sup>2</sup>くらいずつある3ブロックの屋上公園ができています。



図版31



図版30



図版 33



図版 32



図版 35



図版 34



図版 36

すね。大きな方針を決めて、時代のニーズに合わせていく。大高さんはスケルトンにしても人工地盤にしても、当時からその発想——街とともに生きる建築——でつくっているんです。

これは蛇足かもしませんが、そうやってマスターープログラミングとして見た場合、これから基町の空間をどうするか。今の人たちにとつての孫の世代でも曾孫の世代でもいいですが、私はその人たちにとつての都市の姿を、やはり今、我々が考えておくべきではないかと思うんです。これはその提案です。現状の写真と【図版37】そこに緑を合成したもの【図版38】。要するに、被爆地に最初に計画されたのは公園でした。そこにもう一度立ち返つて、本当に国際平和都市・広島にふさわしいオープンスペースをつくってはどうか。施設空間ではなく、空地こそ最大の価値がある。先ほど紹介した大谷先生が丹下先生のところで働いていたとき、平和公園に木を植える作業をされたんです。大谷先生のお姉さんは原爆で亡くなっているんですね。それで非常な思いで公園の計画に携わって、あの木の1本1本が亡くなつた方々の墓標という意味があつた。だから基町のオープンスペースは、とりあえず住宅で100年くらいは利用させてもらいましたけど、できることから減築をしていくて、2050年、これから30年以上先の話ですが、緑の空間に返せるところは返していく。高層アパートは壊すことはできないので、足もとの改善ですね。それと中層公営住宅の計画的除却、市民球場を含む建築群の減築と再



図版37

築、団地中央施設の減築と再生。それをして平和公園と一体となつた大公共緑地をつくり、これを世界平和を象徴する人類のレガシー、“世界遺産”にしたい。原爆が落ちてから100年間かけたマスターープログラミングとして、このくらいの大きな緑地を市民の共有財産として、特別な慰靈の空間をつくるという思いで考えていつたらどうでしようかという提案です。もちろん中層の人たちをみんな追い出すという話ではなくて、30年40年かけて合意形成を図りながらやつていく。そういう行政による、時間軸を入れた都市計画というのは必要ではないかと思っています。少し時間を超過したかもしれません、これが終わります。



図版38

## 「基町住宅地区の活性化の取組について」

発表者＝小林礼幸

### 基町の現状と問題点

広島市都市整備局住宅整備課で基町住宅担当課長をしている小林と申します。よろしくお願ひいたします。私からは、本市と地元の皆さんと取り組んでいる基町住宅地区の活性化について、平成25年に策定した「基町住宅地区活性化計画」を中心にお話しいたします。

活性化計画を策定するときに整理した地区の主要な問題点には、次の4つがありました。まず1番目に高齢化です。広島市において高齢化率は、大体一般地区で21%くらいですが、この地区では平成22年で40・6%と約2倍でした。平成28年には46%となり、5%ほど上がっています。これに伴いまして、自治会の担い手の高齢化、地域コミュニティの活力の低下などが懸念されます。また高齢者の孤独死の増加、それから災害や何かが起きたときに避難支援者等の確保が難しくなつてきているという状況があります。先ほどから公営住宅の話が出ていますが、公営住宅法では、例えば40歳くらいの若年世帯ですと、4人世帯で年収400万円ほどだと収入基準をオーバーしてしまいます。ですから若い方がなかなか入らない。社会構造が変わってきて、法律がこれまでいるところもあるようです。

2番目に要介護者等の増加。多くの要支援・要

介護認定の方が居住されていて、平成24年度で約600人となっています。地区内にはデイサービスセンター等の通所施設が未設置であるため、地区外の様々な施設に通つてサービスを受けておられます。

3番目に少子化。高齢化と合わせて、少子化が進んでいます。平成18年度に小学校の児童数が177人だったのが、28年度では118人です。子供の減少に伴いまして、子供会活動などにも影響が出ています。

4番目に空き店舗の増加があります。空き店舗率が平成24年で25・4%、平成28年で38・7%。店舗数は279なのですが、シャッターが閉まつた店が多い。そこに市が手を入れるというのはなかなか難しいので、どんなふうにしていけばいいか検討しているところです。

これに加えて平成22年の時点で外国籍の方の人口比率が17・5%、平成28年では19・9%ということです、この方たちとの交流も考えていかなければいけない問題です。

このように地区では建物の老朽化だけでなく、少子高齢化に伴う地域コミュニティや商店街の衰退など、多くの問題が顕在化しています。現在当課とともに、建物の老朽化に対して、先ほど藤本先生が仰った高層棟の住戸改善工事を平成34年までに年間約200戸のペースで行なつていまして、それともに色々な活性化政策を進めていければと考えています。

### 活性化の課題と方針

活性化政策についての課題は、次のように挙げています。

- ・高齢者等が安心して、いきいきと暮らせるようにする
- ・若い世代を増やす
- ・地域活動の担い手を確保し、育てる

平成24年度にはコンサルタントに業務委託をして、活性化計画の策定を進めました。活性化の方向性と具体策について、住民の代表の方、学識経験者、行政職員で構成する基町住宅地区活性化検討会、それとコミュニティおよび商店街活性化検討部会において、住宅だけではなく商業や福祉なども含めた幅広い観点から検討を行ない、その結果を活性化計画として平成25年度に取りまとめています。実は基町のようすに自治会がまとまつた地区はなかなかなくして、私もこうした検討会に出ますと、基町はとても多くの問題が顕在化しています。現在当課としては、建物の老朽化に対して、先ほど藤本先生が仰った高層棟の住戸改善工事を平成34年までに年間約200戸のペースで行なつていまして、それともに色々な活性化政策を進めていければと考えてあります。

活性化計画における活性化の基本理念は、「ひろしま真ん中、つながつて生きる『ふるさと基町』～愛着と誇りあるまちづくり～」です。キーワード

としては「絆」を挙げています。「住民みんなが基町に愛着を持つて、みんなの力でまちづくりを進めしていくように取り組む。まちづくりが進むことによって、地域への誇りも醸成されることが期待され、そのことは基町を『ふるさと』と思う心につながる。住民が基町に愛着と誇りを持ち、『ふるさと』と思うこととは基町の特色であり、地域力の向上につながる。」、このようなことを意図しています。

その上で三つの将来像を掲げています。一つ目が

「安心と笑顔の基町」。みんなが安心して、いきいきと笑顔で暮らせる街を目指す。二つ目が「出会いと交流の基町」。住民相互が交流し、支え合い、地区外の人とも出会いのある街を目指す。三つ目が「にぎわいの基町」。商店街や地域の資源を生かし、人が集い、にぎわう街を目指す。

具体的な取組について、まず「安心と笑顔の基町」

ですが、活性化の方針としては次の3つです。

- ・多世代・多様な世帯の居住の促進
- ・高齢者等が安心・快適に暮らせるまちづくり
- ・子育てしやすいまちづくり

そしてそれぞれ、「若年世帯、子育て世帯等の入居促進」、「デイサービスセンター等の設置」、「子供たちの活動の場・居場所づくり」などを主な取組として掲げています。公営住宅法では、住宅や店舗をそれ以外の用途で使うときに国の承認を得る必要があるのですが、この計画ではその認定を取っています。今後、必要に応じて公営住宅法の外に出て、まちづくりをしていこうと取り組んでいます。

としては「絆」を挙げています。「住民みんなが基町に愛着を持つて、みんなの力でまちづくりを進めていくように取り組む。まちづくりが進むことによって、地域への誇りも醸成されることが期待され、そのことは基町を『ふるさと』と思う心につながる。住民が基町に愛着と誇りを持ち、『ふるさと』と思うこととは基町の特色であり、地域力の向上につながる。」、このようなことを意図しています。

次に「出会いと交流の基町」では次の2つを活性化の方針としています。

- ・多様な文化が交流できるまちづくり

- ・団地共用空間の再編・活用

そして「外国人・帰国者のサポート、交流の仕組みづくり」、「屋上庭園の活用」などを主な取組として掲げています。

「にぎわいの基町」では3つを活性化の方針としています。

- ・地域資源の再発見と活用、魅力づくり

- ・にぎわい再生（商店街等）

- ・人・組織づくり

そして「地域のマップづくり」や「基町アートロー  
ド、アートによる魅力づくり」、「基町応援団づくり」  
などを主な取組として掲げています。

なお、活性化の推進体制としては、地区住民さん  
は地元において自主的な実行委員会等を設置する  
とともに体制強化に取り組む、本市は地区住民や関係  
団体との連携を図って取組の支援を行なう、そ  
ういう位置付けになっています。

### 活性化に向けた取組

事例③ですが、「安心と笑顔」に向けた取組として、

目的外使用による若年世帯・学生の市営住宅への入

居ということを、平成27年から行なっています。先  
ほど少し話をしましたが、公営住宅は低所得者の居  
住の安定を目的に整備されているため、若者の入居  
促進ができません。ですから所得の増加を見越して、  
若年家族や子育て世帯は特賃住宅の収入基準で入  
ていただいている。これは「地域再生計画」とし

めています。他にデイサービスセンターの設置等に  
ついても、関係課と意見交換を進めていまして、な  
んとか実現していきたいと考えているところです。

事例②は「出会いと交流」に向けた取組です。こ  
こが基町地区と他の地区の違うところで、こういう

自主的な取組があるのはすばらしいことだと思います。  
それは社会福祉協議会による地元独自の活動です。國  
版39」というものが、平成19年に開設されています。

高齢者の方がここに寄られて、お茶飲み話を通じて  
互いの安否を確認されるとかですね。午前10時から  
午後4時まで、週3回開いていて、使用料は無料で

す。もう一つは「ほのぼの文庫基町」という図書室  
です。これも同じような手法で、週2日、多文化共  
生の拠点にするということで、基町小学校の保護者  
さんがボランティアで運営されています。広島市大  
学の学生さんによる読み聞かせや、夏休みには引退さ  
れた基町小の先生が子供たちの勉強を見るという活  
動もされています。シャッターの絵は基町高校の学  
生が描いています【図版40】。

事例①「安心と笑顔」に向けた取組として、  
実際の取組事例を紹介させていただきます。まず  
事例①「安心と笑顔」に向けた取組として、平成15  
年に開設した在宅介護支援センターがあります。こ  
れは活性化計画に先立つ福祉施策の取組です。また、  
地域包括支援センター、これも平成18年にできてい  
て、これらは活性化計画の中で継続して拡充して進



図版 40：ほのぼの文庫基町のシャッターの絵



図版 39：ほのぼの基町



図版 41：基町地区町民体育祭

これらは今後の対応として、中層と高層で合わせて約50戸の入居を計画しています。目的外使用は1年更新で最長10年までという条件で国から承認を取っているのですが、地区に根づいていかなければいけない取組ですから、その先のこととも検討していると考えています。

事例④は「出会いと交流」に向けた取組で、外国人や帰国人者のサポートをしています。「いろんな国の人人が集まつて、子育てについて話をしながら、基町でいつしよに子供を育てませんか」をテーマに、平成26年、小学校低学年の児童の保護者を中心として交流会を3回開催しました。子供たちは日本語が

て国の承認を取っています。本来なら入居のたびに個別に大臣承認を取らなければいけないのを、手続きを省略して、報告だけで済むようにしています。対象者は、ご夫婦の満年齢の合計が80歳未満、父子・母子家庭さんの場合は40歳未満。また中堅所得者ということで、月収が15万～48万円くらい。それと体育祭や敬老会、原爆慰霊祭兼盆踊りなど、自治会の活動に参加していただくことを条件にしています。

【図版41】。家賃は普通のところの約半分、3万円前後からで、現況では3世帯入居されています。学生さんは、地区の活性化を題材として卒業論文や修士論文を書くことを条件に、家賃が大体1万円前後で、この10月にお二人入っていただきました。ちなみに今日は学生さんもいらっしゃるのでPRしますと、この12月1日からまた2戸分募集するので、どうぞ応募していただければと思います。

ペラペラなのですが、親御さんには得意でない方もいらっしゃるので、こうした取組をしています。

事例⑤「にぎわい」に向けた取組としては、基町マップづくりをしました。基町住宅やその周辺を実際に歩いて、地区の資源を地図にして、これからの中町の活性化に役立てようという試みです。活動を応援する大学や市役所の有志にも参加していただき、平成26年にマップを作ったところです【図版42】。

他に「にぎわい」に向けた取組には「基町プロジェクト」があります。今日もその一環のですが、創造的な文化芸術活動や地域との交流によって街の魅力づくりや地域の活性化を目指すという、広島市



図版 42：基マップ



図版 43：基町プロジェクト活動紹介（一部）



図版 44：「基町、昔の写真展Ⅱ」会場風景（基町中央商店会）

立大学芸術学部さんと中区役所とが連携した事業です。平成26年に現地事務所として基町の98号店舗に「M98」を開設し、基町のにぎわい再生の実現に向けた取組をしています。ショッピングセンターの入口に活動の記録を掲示したり【図版43】、通路を色鮮やかに飾ったり、写真展【図版44】を開催したりなど、活性化推進に取り組んでいる状況です。

その他「基町研究室」は、広島県立大学のサテライト研究室ということで、学生や地区住民が集う場所として、97号店舗に試行的に整備しました。今後の活性化に向けた活動や準備作業に、どの大学でもどなたでもいいので、使用していただければと考えています。

私も、活性化計画を通じて、皆さんと同じ未来を見つめて絆を繋いでいかねばと考えていますので、今後ともご協力よろしくお願ひいたします。

## パネルディスカッション

パネリスト＝石丸紀興、藤本昌也、小林礼幸  
司会＝松隈洋

### 大高正人の足跡をたどる

松隈 京都工芸繊維大学の松隈です。よろしくお願ひいたします。10月26日から、東京の国立近現代建築資料館で、「大高正人の方法」という展覧会が「建築と社会を結ぶ」をテーマに開催されています。ご遺族から資料の寄贈を受けて、2年ほどかかって展覧会になりました。実は大高正人という建築家は生前に展覧会をやっていません。ですから大高正人という大変大きな仕事をした建築家の全体像が、ようやく皆さんに見ていただけれるようになつたわけです。



大高さんは、1923年、9月1日の関東大震災の1週間後に、福島県の三春で生まれています。それで亡くなつたのは2010年です。つまり彼の生涯は、関東大震災以後の大変な状態、それから戦争に向かう時代、そして戦後復興を経て、最終的には私たちの記憶に新しい3・11の震災の直前に亡くなっています。今、大高さんの故郷の福島が大変な被害を受けているということで、私には非常に象徴的な建築家であるように思えます。今の福島の復興の問題も、どこかで広島のことに関連するような印象を持ちながら、この大高正人の展覧会を組み立てました。

今スクリーンに映されている模型ですが、基町ア

パートが広島のどういう場所に建つてているのか示したいと考えて、広島大学の千代章一郎先生にお願いして制作していただきました。1／500で長さが4mほどありますが、広島の平和記念資料館、平和公園から基町アパートまでを一続きの模型として、大高正人展のセンターテーブルの中央に置いています。今日すでに先生方がお話しになつているとおり、原爆によって一面の廃墟になつた広島が戦後どうやつて再生していくのか、やはりその事実を知らないと、この基町アパートがどういう意味を持つのか、あるいは大高正人をはじめ、この建物をつくり上げた人々がどういう思いを抱えていたのかということが、理解できない。今日、第1部でお話しただいたことでおおよそ語り尽くされているかもし

れませんが、大高さんの仕事を通じて広島が戦後に抱えた問題を考えることが、広くはこの日本の国にとって制作することにも繋がるのではないか。そういう思いで、ここで皆さんとお話ができるいいなと思っています。

大高正人は戦時に東京大学で学んでいましたが、その頃から遠く憧れた建築家に、フランスのル・コルビュジエという巨匠がいます。コルビュジエは第1次世界大戦後に住宅が不足し、都市が劣悪化しているなかで、建築に何ができるのか、人間のための建築はどうしたらできるのかと訴えた建築家です。学生時代の大高は戦時下にコルビュジエの本を読んで、そこに希望を見ていた。その大高の前に、前川國男という、コルビュジエに学んだ建築家が非常勤講師として現れた。それで大高さんは前川國男に私淑するようになつて、大学院時代から前川事務所に通い始める。ですからこの基町アパートには、建築をいかにして人間のためのものに組み換えるかというコルビュジエから流れ込んだ部分がたくさん実現されているんです。広く歴史を捉えると、人間のための建築や人間のための都市をどうやつて築いたらいいのかという、100年近く続く長いプロジェクトの一つに、この基町アパートを位置づけることができるわけですね。

休憩時間にたくさん質問をいただきましたので、また後で紹介したいと思います。まずはお隣の藤本さんに伺いますが、学生時代の大高正人が前川國男に出会い、学生時代から前川國男の事務所に通つた。

のと同じように、藤本さんはまだ早稲田大学の学生だった頃、同級生の増山敏夫さんとともに大高さんに出会って、大高さんの仕事に関わるようにならねた。そういうところからもう少し、大高さんが建築を通していちばん大事にしようとしたことに触れていただけないでしょうか。

**藤本** 私は大学4年のときに大高さんと出会うことができる、それからかなり洗脳されて今に至っています。大高さんが常に言い続けていたのは、建築家はもちろん建築をデザインする能力がないといけないのだけど、それと同じように、社会とちゃんと向き合つて建築を考える、あるいは街とちゃんと向き合つて建築を考える。デザインの能力があるというのはある意味で当然のことで、それ以前のスタンスを重要視していました。

基町に関連して言えば、大高さんはこういうことを言っています。1963年に京都国際会館のコンペがあり、それから1969年に最高裁判所のコンペもあって、大高さんは両方とも敗れてしまつた、ただ、もし京都と最高裁、それから基町と先ほど話した坂出の人工土地、この4つの仕事の依頼があつてどちらか2つを選ぶとしたら、自分が選ぶのは間違いくらいなく基町と坂出だと。理由は、基町や坂出是一般性があり、かつ社会性があるから。自分はそういう社会の問題を抱えたプロジェクトのほうに軸足を置くということなんです。確かに基町と坂出は、街の問題もいっぱい抱えていた。都市計画としても、広島市は戦災の復興で非常に苦労していますね。そ

ういう問題に対しても建築も応えないといけない。こ

れはけつこうな重圧で、石丸さんが指摘された基本条件に対する葛藤もあつたし、10年間色々なことを言われ続けた。そういうなかで、なんとか解を見いだした。だから大高さんは決して、自分が出した答えが唯一の最終解答だとは考えていませんでした。

建築というものは生き続けて、持続可能なたちで改善や改修がされる。そういうことを次の世代また次の世代がやっていけるように、基町も坂出も、非常に厳しい条件のなかで、基本的なことを間違えずやるという気持ちで取り組んだ。私もこれは、大高さんや我々の世代、だろうが、若い人たちだろうが、建築をやる人にとっては共通のテーマだと考えている。

#### 広島の歴史が語りかけること

松隈 先ほど話し忘れましたが、大高さんは生前、展覧会だけでなく、作品集も出しませんでした。例えば丹下さんの代々木オリンピックプールなど、あるシンボルとなるような仕事は世間にても伝わっていると思うのですが、大高さんの仕事は面倒くさいばかりであり成果が見えない、でも実は大事というもので、それがあまり皆さんに伝わっていないのではないか。そこで大高さんの仕事の全体像を伝え本を出そうということになり、この大高展の前、2011年3月11日の直後くらいから、藤本さんなどが大高さんに学んだ方たちが中心になつて集まつて、2014年に『建築家 大高正人の仕事』（エク

スナレッジ）という本が出ることになりました。

この本には大高さんの言葉もたくさん入っています。大高さんが活躍された1960年代から70年代にかけては日本が高度経済成長期に入つて、華やかな建築がどんどんできている時代ですね。けれども建築家がそういう単体のものだけをやつていたら街はよくならない、それとは違うところで社会に求められているものはたくさんあるのではないか、そういうことを大高さんは述べています。京都の国際会

館のコンペが終わつて、大谷幸夫さんが1等を取つたときには、大変なお祭りのような立派なコンペがあつて1等が決まつた、でもそれはどんなに立派でも所詮京都の一つの建物に過ぎない、私たちの目の前には私たちが解決しないといけない問題が山積みになつていて、そういう困難な日常に帰ろうじやないか、そういうことを書かれています。

3年前、丹下健三生誕100年の展覧会が香川県立ミュージアムで開催されたときに、広島の平和公園にも関わった大谷幸夫先生にインタビューさせていただきたいんです。ただ、もうご高齢で、ほとんど声が録音できなかつた。だから活字にはなつていないので、大谷先生が「広島の平和記念資料館がピロティで高く持ち上げられているのがどういう意味か分かる?」という話をされたんです。つまり、あそこの公園にはたくさん遺骨が埋まつていて、遺品がたくさん落ちていて、それをまさに正倉院の宝物のように高床で掲げて残そくと思つたと。

先ほど藤本さんが慰靈という言葉を言われまし

た。あそこが公園になつたのはたまたまだつたかも知れませんが、あの場所が持つてゐる歴史的な意味をみんなが背負いながら広島は復興した。これから基町アパートの周辺や市民球場の跡地をどうするかとか、色々な課題があると思いますが、今まさに被爆者が一人もいなくなるうとしている時代に入るなかで、僕はこの大高展を通して、広島の当時の人々が向き合つていていた問題を考える必要があると思うんですね。なんだか僕の話は暗くなつてしまふません。

石丸先生に少し明るいお話を聞いていただけたら。

石丸 私は設計の仕事をしていない、一介の研究者で、自分に何ができるかといつも思いながら研究をしているのですけれども。基町の高層アパートについては、今日は報告しませんでしたが、完成後の居住実態調査などはかなり丹念にやつてきたつもりなんです。そのとき調査をしながら、そして今もずっと思ひが募つているのは、大高さんの壮大な枠組みの構想、そしてものすごく苦労されている設計を、私自身も広島市民も、あまり理解しないで表面的なことばかり言つてゐるのではないか。その思いがずっとあるんです。この前、一昨年ですが、51C型やDK論についてのシンポジウムをやりました。DKについても、批判はあるとしても、DKのよさを分かつてきている人がまずDKに住んでほしい。だから基町も、大高さんの思いを理解して、それを評価している人にもつと住んでほしい。公営住宅のシステムも修正しないといけないのでしょうけど、まずその街に住みたいと思う人に住んでもらえるようにで

きたらしいなと思います。我々研究者も、今まで少しサボつてきたところもあるかと思うのですが、基町のどこが素晴らしいのか、評価されることなのか、一定の情報を提供しながら住人とともに議論していく、そういう社会をつくっていくということですね。

それから先ほどの藤本さんの提案と関係しますが、私はこの前あるところで、丹下さんの原爆資料館の世界遺産化を目指すと提案しました。東京では槇文彦さんを中心に、代々木の体育館の運動がされていますよね。槇さんに「できれば一緒に」と言つたら「広島は広島でやれ」と言われてしまつたんですけども（笑）。ただ、確かに広島は、丹下さんの建築もすごく世界史的な意味があるし、原爆関連の展示物や、それから今、足もとから色々なものが出てきて、発掘しているんですよね。そういう3点セツトで世界遺産を目指す方向で、話をあげていただける。そしてこの大高さんの基町アパートも、世界遺産にする必要は必ずしもないのかもしれません、が、広島の重要な軸であるというような、そういう発信をこれからもつとしていかなければいけない。そしてその過程で広島の戦後の歴史もつと掘り下げて、色々とまとめたり発表したりしていく、そういうことを私もさせていただければと思つています。

### 今できることは何か

松隈 僕はアウェイから来ているので若干喋りにくいのですが、丹下健三は東京大学にいたから原爆に

遭わずにすんだけれど、旧制広島高校の出身で、やっぱり学友をたくさん失つていて。だから1946年に広島の復興計画を立てるときに、「私はたとえわが身が朽ちるとも、というほど思いで広島行きを志願した」と自伝に書かれていますよね（丹下健三『一本の鉛筆から』日本経済新聞社、1985年）。

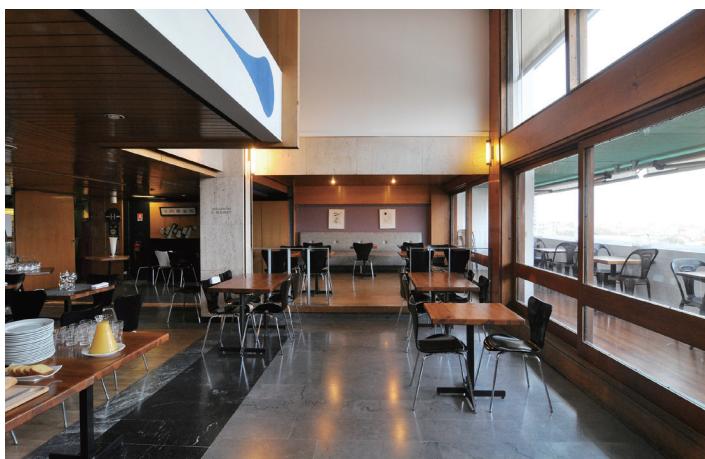
そういうピースセンターの成り立ちや丹下さんの思いを大学の講義で話したときに、終わつた後、学生の一人が寄つてきて言つたんです。自分は広島の丹下さんの高校の後輩に当たる、確かに広島では被爆されで廣島を復興していったのかという話は教えてもだれども戦後に建築家を含む人々がどういう思いで廣島を復興していったのかという話は教えても言つてきますと、そう言つたんです。丹下さんは生誕100年を過ぎて、大高さんも今年七回忌になりますが、当時の色んな人たちが自分にできることは何かと考えてきた、広島という場所はそういう歴史を持つていて。ですから今は原爆ドームだけが世界遺産になつてますが、歴史的な遺産としてこの一帯全体にどういう価値があるのか、ぜひ子供たちにも伝えていかないといけないし、世界に向けても伝えていかないといけない。

小林さんすみません、そういう話を向けられても難しいかも知れませんが、先ほどお話をされた高齢化や少子化、シャッター商店街とか色々な問題とともに、基町が歩んできた歴史 자체が、これから時

代を考えたとき、みんなの希望になるようなものを持っていると思うんです。例えば先ほど学生さんが住めるようにというお話をされました。世界遺産になつたコルビュジエのユニテという集合住宅は、一部が宿泊施設になつていて、コルビュジエのファンがそこに泊まつて建物のよさを味わえるようになつて。基町は公営住宅の縛りもあるし、住んでいる方や地域の問題も色々あるでしようけれども、この建物が持つているポテンシャルを、何か新しいかたちで上手に開いていく。色んな人の目に触ることによって、建物の価値を住んでいる方も地域の方も理解して、少しずつ認識が蓄積されるような道すじが見つけられるといいなと思うんです。どうでしょうか。

小林

そうですね。基町の歴史を考えたときに、今この状況のなかで残していくためにどういう仕掛けをするか、広げていくためにどういう仕掛けをするかということを考えていかないと思います。仰つたようなホテルという案も、皆さんで議論しながら、そういう可能性があるのなら検討していきたいところです。一方で私が実務者として思うのは、建物の修繕などをしようとしたときに、大高先生はたぶんいろいろと考えられて、特殊な構法を駆使してぎりぎりのところで設計されている。それを僕らが好きに変えていくのは、デザインとしても法律としても、なかなか難しいですね。とにかく将来的にどういうふうになるのか明言はできないですが、できることをやつていければと思います。



[写真右上] 集合住宅ユニテ・ダビタシオン（マルセイユ）外観。

[写真右下] 同集合住宅内の「ホテル・ル・コルビュジエ」ルームキー。

[写真左上] 施設内のカフェ（ホテル宿泊者の朝食会場。宿泊者以外も利用可能）。

[写真左下] 「ホテル・ル・コルビュジエ」の客室。



藤本 先ほど紹介した坂出の人工土地は、耐震診断をしたら大改修をしないといけないということになつたんです。街的な機能も改善しないといけないのだけど、いちばん困っているのは権利関係なんですね。あれは住居の人も店舗の人も、各自の所有権はマンションの区分所有法と同じ考え方で仕切られている。民間のマンションでは、更新のときなんかに大変な騒ぎになるんです。特に住人が高齢者で、マンションを出ていくつてしまふということになるけど、残つた人にぜんぶ負担がかかってくる。そういう意味で、もし基町も、ああいう立体的な大建築が民間で区分所有だつたら大変ですよ。基町は基本的に市がぜんぶ持つていてから、まだ安定して持続可能である。だけど市も財政的にどこまでいくか。

それを考へると、私は公的住宅と民間の住宅の間のところに可能性があると思います。英語でいうとソーシャル・ハウジング。ある種の社会的な組織が基本的な構造体を所有していて、空間の利用権は住む人が持つ。ヨーロッパでは居住権と言われていますが、やはりそういう中間的な組織で、まちづくりの問題まで視野に入れる。商業施設を設置するとか、あるいは宿泊施設として受け入れできるとか、とにかく市の税金で常に運営するというよりは、新しいソフトの制度も考へるべきだと思います。人口減少の時代のなかで、この先、公共側も負担できない、民間も負担できない、ということになります。そういう意味で、我々は大高さんからかな

り重い宿題を与えられたというふうに考えていました。

**質疑応答**

ここで会場の錦織亮雄さんに発言をしていただいたいのですが、質問用紙には「私的世界とみんな的世界の調和、バランスが人間にとつての永遠の課題ですが、そのバランスが崩れつつある。そのバランスを実体化し、新しいコミュニティを見いだす方法を持つていわゆる集合住宅がつくり出され、基町住宅もその夢が盛り込まれている。でも課題を含んでいて、広い意味では集合住宅の可能性というのはどうなのかということを問いたい」と書かれています。また、基町の計画が北へ延びて、長寿園公園

を潰して計画をすることになつた経緯を知りたいという質問もいただいています。そこはまず石丸先生に伺いましようか。

石丸 県と市は、戦後直後に公営住宅を建てるときも、県営住宅と市営住宅で分けあって計画・建設したわけですね。それで再開発のときにも、県担当と市担当で微妙な線が引かれた。特に検討時期、不法占拠されていた相生通りは県担当だつたんです。それを市とどう分担するかというときに、基町の南のほうの地区は市が全体的に計画すると。で、県の計画もそれに近いほうがいいということです。長寿園にされたのだと思います。あそこは河川改修をして、流量の関係で埋立てによる利用面積が確保できただと

のでしよう。再開発として、基町とも一応繋がつてありますよね。詳細な理由や考え方については、私は十分存じていないのですが、県と市とはそういう対応の仕方になつてていると思います。

松隈 では錦織さんにマイクを渡していただいて。

錦織 長寿園に延びた理由を聞きたいと思つたのは、実は私は昭和20年の8月6日と8月7日、長寿園公園で過ごしたんです。子供、だつたからよく分かりませんが、たぶん1500人くらいの人たちが、みんな自分の家が焼けている間、長寿園の公園に集まつた。そういう場所が、わりといとも簡単に埋め立てられた。『都市住宅』の特集の最初の写真を見てもですね、住宅が少し違和感を持つて北に向かって延びている感じがしたものですから、何か切羽詰まつたいきさつがあるのではないかと思つて質問しました。1問目の話はここではもういいですね。

### 広島基町のこれから

松隈 続いて今井みはるさんという方からの質問ですが、「藤本さんが提案されていた時間軸を含んだ都市計画に同感です。周辺環境に基づき、かたちを引き継ぐことにも賛同します。都市軸の線上にある球場の跡地の活用に関心を持っていますが、象徴的な場所における大公園緑地という、藤本さんが提案されていたものを具体的にどのように、誰に提案して進めたらいいと考えておられるでしょうか」といふことです。その他、都市計画を行なうなかで、民間団体が大きく関わつて、ワクワクするようなまち



づくりをするためにはどうしたらいいか。それから無理な活性化事業よりもポジティヴに何かをなくしていく、まさに空地を増やして魅力をつくり出していく方法はどう考えられるのか、といった質問がありました。

小林 空地の確保については、建物には耐用年数というものがありますし、ソフトの面の問題も含めて、どうやって更新していくか、なかなか一つの考え方進められないところがあります。市としては、その辺はまた皆さんに広い意味で活用方針を示しながらやつていくことになるかと思います。先ほど藤本先生の公園案、ああいうものも含めて、今から議論していく問題ですね。すべてを残すということではなくて、残すところは残す、活用するところは活用する、それは総合的に考えていく必要があると思います。

### 石丸 私は十分な答えができませんが、市民球場の跡地について色々な人たちが議論しているのを見て

いますと、残念ながら本当にコンセプトの言葉が貧しいと思うんです。施設の話に到達する前の空間の捉え方を、もつと我々は本気でトレーニングして、議論する必要がある。すぐにこんな施設がいいとか、運動施設がいいとか、文化施設がいいとか、そう言って答えを出そうとしても、歴史のなかで広島が持るべき役割にたどり着けないと思うんですけどね。

藤本 実は私は多少、広島市民のつもりでいるところがあるんです。私は終戦1年後に満州から引き揚げてきて、古田小学校を出て、幟町中学校を出て、

国泰寺高校は2年まででしたけど、その間、広島市に住んでいました。自分なりに広島という場所にこだわっているので、発表の最後に公共緑地の提案をさせていただいたんです。それをどういうふうに実現するかというご質問に対応してですが、例えば広島市の公共公園として市が維持管理をする、そうすると結局は公園緑地課の私有物のようになる可能性がある。日本の場合の公というのは、行政がリードする一方、往々にして市民のほうは動かない。しかし、あらだけの公共緑地をつくるとなると、やはり市民全員がみんなであれをつくろうという流れにならなければいけない。ですからもし実現するとしたら、市や国の税金をもらうもあるとしても、やはり緑の基金みたいなことをして、市民のお金があなたがみんなで出して、みんなの共有財産として空間を維持する。それで本当の意味の公園になるのだと思います。だからそこの社会システム、言うなればソフトのほうがなかなか追いついていないということですね。大高さんも、みんな今が大事だと考えるけれども建築は必ず続く、だから未来を見通さない建築はないと言つていました。そういうことを今、改めてこの基町には考えさせられます。

松隈 実は藤本さんと僕は、新国立競技場についてのシンポジウムでも一緒にしているんです。明治神宮の外苑は、色んな経緯があると思いますが、100年前の人々が100年後に初めて公園が完成するようなつもりで、労働奉仕だつたり全国に寄付を募つて植樹したり、取り組んできましたよ。

だからそういう思いがみんなの記憶に留まっているうちはあるのか分からぬ計画で、気がつけばどういう必要があるのか分からぬ計画で、あの場所が持つていった場所性を破壊し、木も伐採してとなつた。そうしたとき、公共性をいかに育み、みんなにとつてよい場所をつくるのか。だから広島も、石丸先生たちの調査も踏まえて、建物に色々な記憶が浸み込んでいるということを大事にしていきたいですね。

そろそろ終わりの時刻ですが、広島大学の千代章一郎先生も来られているので、最後に一言お願ひいたします。この大きな模型を、基町アパートが持っている意味を分かりやすく伝えたいという思いで、大変なご苦労をして、学生さんと作つてくださいました。

千代 広島大学の千代です。学生の松本君をはじめとして5人から7人で、2ヶ月か3ヶ月くらいかけて模型を作りました。たぶん学生たちも同じだと思

います。たぶん学生たちも同じだと思

いますが、作りながらいちばん感じたのは、やはり非常に熱いということです。確かにスタイルとしては近代建築で、どこにでもあるようなヴォキヤブラーを使つているのですが、でもやはり熱いものがいる。単純に言うと、コンセプトがある建物なんですね。コンセプトがあるということとは少し違います。コンセプトは生きることの根源的な提案だとか、社会に対する提案だとかを含んでいる。それがいいのか悪いのかではなくて、あること自体がすごいことだとか改めて感じました。それは時代がそうさせているの

かもしないですし、あるいは広島という場所がそうさせているのか、私には分かりませんが、そういうコンセプトがなくなつてしまつたことに対する批判を、先程来石丸先生が仰つておられるのかな?と思ひながら聞いていました。

松隈 ありがとうございました。もうまとめになつてしまつますが、廣島が持つておる世界へ伝えられるメッセージ、未来へ伝えられるメッセージを、基町アパートと平和公園を一体的に捉えて発信をしていただきたい。また、若い人たちがその作業に関わるなかでこの場所を大事にしていく、そういう動きに繋がつていってほしいと思います。

短い時間でしたが、このシンポジウムが何かのきっかけになることを願つて終わりたいと思います。どうもありがとうございました。

うちはよかつたのだけど、気がつけばどういう必要があるのか分からぬ計画で、あの場所が持つていった場所性を破壊し、木も伐採してとなつた。そうしたとき、公共性をいかに育み、みんなにとつてよい場所をつくるのか。だから広島も、石丸先生たちの調査も踏まえて、建物に色々な記憶が浸み込んでいるということを大事にしていきたいですね。

そろそろ終わりの時刻ですが、広島大学の千代章一郎先生も来られているので、最後に一言お願ひいたします。この大きな模型を、基町アパートが持っている意味を分かりやすく伝えたいという思いで、大変なご苦労をして、学生さんと作つてくださいました。

千代 広島大学の千代です。学生の松本君をはじめとして5人から7人で、2ヶ月か3ヶ月くらいかけて模型を作りました。たぶん学生たちも同じだと思

います。たぶん学生たちも同じだと思

いますが、作りながらいちばん感じたのは、やはり非常に熱いということです。確かにスタイルとしては近代建築で、どこにでもあるようなヴォキヤブラーを使つているのですが、でもやはり熱いものがいる。単純に言うと、コンセプトがある建物なんですね。コンセプトがあるということとは少し違います。コンセプトは生きることの根源的な提案だとか、社会に対する提案だとかを含んでいる。それがいいのか悪いのかではなくて、あること自体がすごいことだとか改めて感じました。それは時代がそうさせているの

## 基町高層アパート見学会

2016年11月12日

講師＝藤本昌也・高田由美

聞き手＝福馬晶子（アーキテクツ広島）

### 解説

藤本 今日はこのあと2時から、大高さんの展覧会に関連するイベントとしてシンポジウムがありますが、基町アパートの屋上の見学会自体は毎年やつておられるようですね。自分が関わったものを説明するのは、色々な思いもありますから大変やりにくい。第三者の人に説明してもらつたほうがいいような気もしますが、私はすこし広島とも関係があるものですから、まずその話を最初にします。

私は1937年に満州で生まれて、引揚者なんですよ。それで戦争が終わって帰つてきたところが西区の高須。もとも父のほうの両親が住んでいて、原爆で死んでいるか生きているかも分からずで帰つてきました。幸いに家が残っていて、多少天井が吹き飛んだりしていましたけれど、そこへ駆け込んだんです。親父はソ連に捕虜で引っ張られて、これも死んでいるか生きているか分からぬ状態。母が4人の子供を連れて帰つてきた。だから僕は当時あつた古田小学校の卒業生で、この近くの幟町中学を出て、それから高校は国泰寺高校という、約8年間ずっと広島にいました。ですから同級生や友達は今でもたくさんいるんです。

で、非常に幸いなことに、親父が3年して捕虜から釈放されて帰つてきました。ぜんぜん就職口がないなかで、たまたま親父は建築の技術者だったのですから、市役所に入つたんです。住宅建設課と當時も言つていますが、その係長くらいまでやつたのかな。当時、コンクリートが分かる人がいなかつたんですね。親父は分かるというので、スタッフのために構造の研修をするような場を設けながら、大勢の仲間とわいわいやつていたんです。そのうち私が大学に入る頃に独立して、構造事務所を始めた。で、私は大学を卒業して、大高さんの事務所に1期生として勤め始める。大高さんは前川事務所を辞めて、1962年に事務所をつくるんです。だからその6年後、68年に、国あるいは市や県から要請があつて、基町アパートのプロジェクトを担当する建築家として選ばれた。私はたまたま広島の出身で、なおかつ住宅建設課の人たちがみんなかつての親父の部下や後輩で、家にもよく来ていた。「やあやあ久しぶり」というような感じだったのですから、大変仕事がやりやすかつた。

当時、高層の集合住宅は3年くらい前から公団が先行して、東京の江東区辺りで11階建てや14階建て、2000戸や3000戸の大きなプロジェクトとして進めていました。ただ、こういう公営住宅の建物は4階か5階建てくらいの中層、それもほとんど標準設計で、国が決めたとおりにやりなさいという時代だつたんです。基町はここ一帯の応急で建てた木造住宅が老朽化して、もうこのままではいけないと

いうことで、中層の住宅団地に建て替えることになつていた。大体ここに1000戸近く建つていたんです。それと河川敷にスラムで、ものすごい数の不法住宅があつた。それをぜんぶ一緒に中層で新しくしようとしたら、どうもそこにいる人たちを含めると2000戸以上あつて、とても入らない。国が建てられて、それは丹下さんのところにおられた大谷幸夫さんという建築家が設計をした。ですから大谷さんと大高さんが、東と西で、新しい高層の公営住宅を開発したわけです。

ここでよかつたのは、高層住宅にお金がいくらかかるとか、どういう設計にしないといけないとか、そういう基準がなかつたことです。たぶんその頃は市もよく分からなかつたし、市を指導する立場である県もよく分からぬ。しかも大高さんは国に選ばれた人だから、もう「大高さんと市長にお任せします」という感じで、ある程度自由にやれたんです。さらに当時の山田節男さんという市長は、外交官で国連の仕事をされていた方で、フランスにも住んでおられて、ル・コルビュジエなんかのことも知つていたんです。で、「日本の団地は汚い」と、最初に言われたんですよ。「とにかく綺麗な団地にしてほしい」と。だからある意味ではもちろん大変だつたのだけど、大高さんの提案がわりと通りやすかつた。

補助金がいくら付くなんて国のほうも決めていないわけです。前例がないから、お金もかかるものにはかかるということになつて。



フランスは当時、コルビュジエが設計したマルセイユのユニテという有名なアパートが建つていますた(1952年竣工)。今は世界遺産もあるのかな、そういうものがヨーロッパで先進的にあつて、それが大高さんのモデルにもなっているわけです。大高さんの先生である前川國男さんは、コルビュジエのところで勉強してきた人なんですね。その頃、コルビュジエの建築は日本でも非常に影響力を持つていて、大高さんも、ある意味で洗脳されているというくらいのファンだったんです。だから基町のアパートの設計も、コルビュジエの考え方がかなり参考になつていて。特にユニテですね。ユニテはメゾネット形式の住戸が積み重ねていて、3層で1セットになつていて。基町も廊下があつて、小さい階段を上がりつて2戸がある。要するに今、日本のマンションはみんな各階の廊下がず一つと伸びていますよね。あれがもつたない。それだつたらむしろ2層ごとの隔階廊下にして、幅は1・5倍くらいにする。コルビュジエの場合は中央が廊下になつていてから外が見えませんが、基町の場合は基本的に外廊下です。だから外観も、低い階と高い階が交互になつて、変化が生まれますよね。

で、そういうものを重ねていつて、いちばん上の屋上をどうするか。コルビュジエはこれも大体フランスは当時、コルビュジエが設計したマルセイユのユニテという有名なアパートが建つていますた(1952年竣工)。今は世界遺産もあるのかな、そういうものがヨーロッパで先進的にあつて、それが大高さんのモデルにもなっているわけです。大高さんの先生である前川國男さんは、コルビュジエのところで勉強してきた人なんですね。その頃、コルビュジエの建築は日本でも非常に影響力を持つていて、大高さんも、ある意味で洗脳されているというくらいのファンだったんです。だから基町のアパートの設計も、コルビュジエの考え方がかなり参考になつていて。特にユニテですね。ユニテはメゾネット形式の住戸が積み重ねていて、3層で1セットになつていて。基町も廊下があつて、小さい階段を上がりつて2戸がある。要するに今、日本のマンションはみんな各階の廊下がず一つと伸びていますよね。あれがもつたない。それだつたらむしろ2層ごとの隔階廊下にして、幅は1・5倍くらいにする。コルビュジエの場合は中央が廊下になつていてから外が見えませんが、基町の場合は基本的に外廊下です。だから外観も、低い階と高い階が交互になつて、変化が生まれますよね。

この建物は柱の間隔が大体10メートルになつているんです。色んなかたちで組み合わされているのだけど、ひとつのユニットは10メートル四方で100平米ですね。そこに2戸入つていて合計3000戸だから、仮に平均階数を15階とすると、10メートル角が100コマ。それが屋上の面積になる。ということは1万平米、1ヘクタールですよね。500

一方、大高さんはどちらかと言うと、日本の家にはちゃんと勾配屋根を載せましょうと、ずっと言つてこられたんです。屋上に上がるるのはいいとしても、設備系のものがいっぱい載つてますよね。それがまさにコルビュジエがやつているようにフラットにしました。基町の計画では、最初に4つくらい大高さんの主張があつたのだけど、その一つが屋上庭園だったんです。大体高層でも公団的にやると、屋上はぜんぶ平らになるわけですよ。そのほうが安いし。ただ、ここで面白いのは、広島は山があり海がありますよね。基町アパートは幸いなことに南に向いて建つて、散歩しながら景色を眺められるようになつた。ランドスケープ的にもすごくいいですね。実は僕たちが最初に絵を描いたときは、この屋上はぜんぶぐるぐる回れるようにしたんです。それはさすがにすごく長い橋が必要になつたりするので諦めましたけれども。

平米の児童公園ならば20個できる。だからその面積を単なる屋根にするのは芸がないし、みんなが使える空間にしたわけです。やはりこれだけ高密度の集合住宅だと、一人あたりのオープンスペースは小さくなりますから。地上の店舗の上も緑の公園になっていますが、この屋上もみんなの生活空間として、パブリックスペースに近いものにした。住んでいる人にとっては、生活空間として屋上に上がる理由ができるほうがいいので、みんなで草花を育てたり、それと集会所。本当はビアホールとかスパがあるとかね、そのくらい公益的なものも入れて、全体が回遊式の公園になっている。そんなものになればいいですけどね。当時はそれがどういうものになるか誰も分からなかつたから、反対もあまりされないで、「いいでしよう、いいでしよう」でつくつてしまつたわけです。

実際にできたときは、まだ周りにこんなにビルは建つていなくて、もっと全体に低かつた。ただ、とにかく広島の最大の売りはこの川ですよね。計算はしていませんが、川の面積も公共空間と考えたら、おそらくこれだけ公共空間の比率が高い都市はない。しかも広島はこの河川敷を營団が緑化している。これも川沿いに住んでいた人は相当大変だったと思いますが、それを公共空間としてちゃんと都市計画で整備した。で、その計画の最後の納めで、あいのところから追い出された人たちを基町でぜんぶ救済すると。

話せば長いのでこの辺で終わりにしますが、要は藤本 本当は基町はぜんぶ都市計画公園だつたんです。中層の団地を含めてね。ところがさつき言つた

**対話**

この基町は、「公」と「私」の間の「共」なのだと考へています。共空間は幅広いですから、一般の人間に開放するか、あるいはある程度この団地の人で管理してコントロールするか、あるいはエレベーターごとの単位でもっと細かく運営するか。とにかくこれららの問題は、管理やエリアマネージメントをどうするかということが重要だと思います。これだけの人が住んでいる団地ですから、維持管理をね、うまく市と住民でやっていかないとならない。屋上はそういう意味でも一つの共有財産として大事なものだから、ぜひ一般の人にもこういうかたちで開放してもらう、あるいは完全に開放できるようまい仕掛けもあるかもしれない。その辺が宿題として、あと何十年か考えてもらえるといいですね。ともかく今日は空間を楽しんでください。



ような住人の救済を考えないといけなくなつたから、公園の北側半分を住宅地にする、そういう都市計画変更を大々的にやつた。今の国交省でも、都市局側と住宅局側と、勢力がふたつありますよね。当時、この基町は住宅局の仕事として、都市局が都市計画で決めたのを半分潰すことになつた。いわば都市側とすれば住宅側が攻めてきたようなことでね。

国も認めたし、市長も乗り気なのに、でも依然として、低所得者向けの公営住宅を建てるよりは県庁の近くだからオフィス街にしたらどうか、とかね、そういう議論を散々したんです。だけどやはり広島の原爆、広島の戦後は、この基町を解決しない限り終わらないという思いがあつた。ここをぜんぶ再生して初めて終わるんだという、そういう住宅側の強い思いでとにかく通していった。そういう歴史があります。

福馬 それで公園の一部として成り立つようなものにしたいという考え方で。

藤本 コルビュジエもそうですが、大高さんも、グランドデザインはすべて社会的な空間だという考えがありました。あまり一部の人が占拠するようなものではなくて、パブリック空間としてつくる。丹下さんも、彼が1等を取った都府の設計コンペで、役所の空間は上に上げて、地上レベルは都民に開放しようとした（1957年竣工）。まさにピロティ空間の序舎のはじりですよね。

福馬 だから基町の1階も屋上も、公園というか八ヶトリックな。

藤本 そうです。なるべく社会的な空間にしようと大高さんは考えた。この花壇は各ブロックの専用と

いうことですか？

福馬 そうですね。コアごとに自治会があつて、その中でどなたかが担当しているはずです。だから自治会ごとに、花が多いところとそうでないところがありますね。

藤本 今は野菜は作つたらいけないんでしたつけ？ 福馬 そうなんです。特定の個人の利益になつてはいけないということらしくて。

藤本 ほんとはテラスみたいに、テーブルがあつてベンチもあつたらいいんですけどね。この床はプレキャストのコンクリートで押さえている、中は空洞になつてているんですよ。

福馬 二重の床になつていてるんですね。一度コンクリートで仕上げたあとに、ダンパーを付けた上で、さらにもう1枚PC版を。

藤本 浮かせてね。防水層は下にあるわけだから。遮音のためにそうしたのだけど、これが太鼓みたいな役割をして、建物ができたあと、音がすこし下の人々に響いてしまつたんです。もう直して改善されていると思いますが、今ちよつと考へているのは、むしろこのPC版を外して、基本的に芝生広場にしたほうがいいのではないかと。土を敷いてね。屋上緑化は今は技術も進んでるし、普通のビルでもやっていますよね。ぜんぶとは言わないけれど、緑の芝生広場にすれば音も問題ないし、下階の断熱にもなる。芝生にして子供たちが走り回って転んでも大丈



夫なようにすれば、もつと親子で屋上に上がるのではありませんかと思いませんけどね。今は老人の慰みのエリ

アみたいになっていますが、若い世代を入れるためにも子供たちが溜まる場所をつくる。

福馬 今こちら側の棟は、住戸改善で部屋を広げて、子供を育てやすくする方向に進めていますね。

藤本 あれはいいですよね。あ、大根が植わっているよ(笑)。

福馬 はい(笑)。菜園もいいと思いますけどね。逆に住民の方が気にされるんですよ。「そういう決まりだし、公になると自分たちが悪者になってしまう」と。

藤本 みんな謙虚だなあ。ばんばん作つていいと思うけど。長く住んでいる人はずっと住んでいるんでしょう?

福馬 そうです。最初から今までずっと、代々住んでおられるところもけつこうありますね。お子さんやお孫さんの世代まで。

藤本 もう45年以上経つていてるから。

福馬 だからかなり高齢化もしているんですけど。藤本 いちばん奥の棟に高齢者住宅として、今までの住戸を半分にしてつくったでしよう。あれはお年寄りが住んでおられるんですか?

福馬 一人住まいの住戸が北の棟にありました。が、一度ぜんぶ出ていただいて、あそこも住戸を合体させて、広い住戸にするというのを今しています。

藤本 ああ、リフォームをしているんですね。でもやっぱり公営住宅の条件に合う人しか入っていな

い?

福馬 そうですね。条件をフリーにしたら、それはそれで色んな人が住んで楽しいとは思うんですけど。

藤本 そこはこれから議論ですね。今、逆に民間は民間で区分所有法の問題があります。東京なんて500戸のタワーマンションがばかり建っているけれど、でも例えば熊本では震災で完全に潰れたマンションがある。その人たちが共同で建て替えないといけない。建て替えるか壊すかどうするかというのは、今は住民の4/5の同意があれば決めてしまふようになりましたが、いずれにしても合意形成がものすごく大変なんです。年金生活でお金をぜんぜん出せない人もいるわけでしょう。だけど建物はどんどん古くなっていく。しかも出て行ってしまう人だっていますよね。戸建ての空き家も問題だけど、マンションの空き家はもつと深刻なんです。例えば100戸の集合住宅で、共益費をみんなで年間10万円ずつ出していたのが、もし半分いなくなつてしまつたとしたら、1戸の負担は単純に言つて倍の20万円になる。今、地方都市の中心市街地で、商店組合がアーケードを維持できなくて、壊し始めているところがある。組合員数が半分くらいになってしまったとかね。アーケードは維持費がけつこうかかりますから。それと同じことがマンションでも起きようとしています。おそらく2025年問題という、団塊の世代がみんな後期高齢者になった時期には、相当色んな問題が出てくると思います。国交省もの

んびりしているけど、抜本的な見直しというかな、なにか対策を立てないといけない。山の上のほうにマンション的なものがあるところでも、引き上げている人がけつこういるでしよう。

福馬 団地が少しづつ空いていますね。戸建てでも離れていいっている。

藤本 そういう意味では、基町は鉄骨のスケールで2層分が自由になるから、用途変更や間取りの変更も楽にできる。それから本当に建物の規模を小さくしたいという場合には、減築もわりと簡単にできる。白い柱みたいに見えているところがあるでしよう。あれはプレキャストコンクリートなんです。耐火被覆として被せてている。

福馬 鉄骨が中にあつて、周りをコンクリートで覆うと。

藤本 厚さがせいぜい6センチか7センチで、みんな継ぎ目があつて、あの単位で外せるんです。梁もそろだし、バルコニーも工場で制作したユニットを組み立てている。ぜんぶ部品化されているから、裸のフレームにすぐできる。鉄を切るのも今は比較的簡単ですよね。コンクリートだと、ガーンと壊して、鉄筋をどう取り出すかなんて大変ですが。これはそういう意味では、コルビュジエなんかが言つてゐるように、なるべく構造のスケルトンと内部のインフィルを分離してつくるという考え方でできています。

福馬 まさにメタボリズム。生きている建築といふことですよね。

**藤本** ええ、ある意味ではね。変わるものと変わらないものを分けて考える。それは日本の民家が基本的にそうなんです。木造で300年くらい経つている民家が今もありますよね。だけどよく見ると色々増築したり、移築して東京でレストランになつてているようなものもある。

**福馬** 古い民家のあり方が、一周回つて実はいちばん先端だったという。

**藤本** 例えばここで言うと、中間階のコンクリートの梁、小さいのがありますね。あれは外せるんです。だから2階分の高さの空間ができる、ぜんぜん違つた施設を入れることもできる。飲み屋が入つてもいいし（笑）。

**福馬** いいですね。ピアホールみたいに高い天井で。

**藤本** そうやって多機能をコンバージョンで入れることができる。大高さんは、これを立体街区と言つていたんです。つまり住宅をただ積み重ねるのではなくて、街を積み重ねる。この廊下も言つてみれば路地なんです。昔のスラムの時にあつた、小さな子供たちが遊べる路地を空中につくるという考え方。だからわざと複雑にしている。

**福馬** 折れ曲がって、しかも階段を上がらないといけないところもありますからね。

**藤本** 酔っぱらつて人の家のところを上がつたりしてね（笑）。だからあくまで街の印象なんです。今マンションを見ると、あまりにも一直線で、70から80メートルくらいの廊下で、鉄の扉が並んでいます。できるだけそういうふうに均質化させたく

ない。妻壁がコールテン鋼という特殊な鉄になつていて、遠くから見ると、あの面がずっと見えるでしょう。

**福馬** ええ、あれはアクセントになつていますね。

**藤本** 大高さんは群造形と言つていたけれど、一つの固まりとしてではなく、群として見える。どかーんとした巨大な壁ができるのではなくて、もっと細かく分節化されている。だから今は同じようなバルコニーが並んでいますが、さつき言つたように他の施設が入つたりすると、そこに変化が出ますよね。そうすると街が立体化したような感じになつていくわけです。

#### 質疑応答

**見学者A** 建物が直線ではなくて屏風型になつてるのはどうしてですか？

**藤本** 普通、中層だと箱型の平行配置にしますよね。でもそうすると建物の陰が伸びて日射が入らなくなってしまう。それで公園がやつた例は、ツイン型と呼んでいますが、南北に長い2棟を廊下を向かい合わせに繋いで、東向きのバルコニーと西向きのバルコニーをつくる。ただ、これも東と西に向いて建つてるので、一方は午前は当たるけど午後は当たらない、もう一方は午後は当たるけど午前は当たらない。だから大高さんはその2棟を開いてね、南東向きと南西向きのバルコニーにすれば、少なくとも正午の光は必ず入る、そういうほうがいいと考えたわけです。

**藤本** よ。平行配置でもせいぜい75メートルくらい。でもこれは対面と150メートルくらい離れているんじゃないかな。特に階段で上がつた住戸は両側が窓ですからね。両方の景色が開放的に抜ける。

**福馬** ええ、あれはシンプルにして、それを通してものを出すと、さすがに市もお金がかかって仕方ないと言つて落とされてしまうから、大高さんが最初は出すなど。まずはシンプルにして、それを通してから後で変えればいいって（笑）。

**見学者B** 第1期のところだけこそ不思議なのは、ピロティの天井が若干低いでしょう。あれはね、どうしても第1期はたくさん戸数を入れないといけないというので、足りなくなつてあそこに増やした（笑）。

**藤本** 追加で1層分ぶらさげたという考え方ですね。あそこはエレベーターと関係なく、専用の階段で上がるようになつているんです。

**見学者B** 人工地盤はなんのためですか？駐車場でもないし、店舗のためにこれだけのものをつくつたということでしょうか。

**藤本** この団地の使命は、もともとこの地域に居住していた人たちを全員救済するということだったんですね。その時に、もともと店舗もいっぱいあつた。だからその人たちも、お店を止めなさいと言つて追い出されたわけにはいかない。それで中央に集めた。最初は学校をこの真ん中に置いていたんです。ただ、先生方から猛反対があつてね。こんなみんなに見張られているようなところは駄目だ、パールなんて女



の先生が泳げない、と言うわけですよ。だから学校は南のいちばんいいところに出して、真ん中に店舗を入れて、その店舗の屋上を公園のようにオープンスペースにしたわけです。

見学者B かなりの量の店舗が入りますよね。

藤本 ええ。270店舗くらい。今はたぶん半分以下だろうな。建築物が真ん中にあると、すごく建て込んだ感じになるでしょう。だから周囲からは丘のようを見える感じにして、建築的な表情は消そうとした。外側からは隠れていて、中に店舗があるなんて分からない。今は木もだいぶ大きくなつてきていますしね。

見学者C 建物の角を出したり凹ませたりしているのは、どういうデザインの意図でしようか。

藤本 これは大高さんのデザイン手法で、よくやることなんです。大高さんはどちらかと言うと、ガラスと鉄でオープンにするよりも、彫刻的に削り取つていくようなセンスがあるんです。

見学者C 模型で考えたりもしたのでしょうか。

藤本 もちろん。僕なんかこんな大きな模型を作つてね。それで建設費が少ないのでしょう。本当はもっとディテールがあるような素材を使えればいいのだけど、コンクリートだけですべてディテールまで見せないといけない。単純にズドンとやつたらズドンとできてしまうのだけど、やっぱりそこは大工さんには頑張つてもらつてね。

見学者C 模型は粘土ですか？

藤本 いや、スタイルフォームとか、バルサもあの

頃はよく使つていました。今はスチレンペーパーがありますが、ああいうのはまだなかつたですからね。外壁は今ペンキを塗つてありますが、もともとはぜんぶ打ち放しでやつていたんです。板を仮枠にして、板目が出るようにした。もう一度塗り替えることでできれば、ずいぶん綺麗になると 思いますけどね。



### 〔関連イベント1〕

#### もとまちカフェⅩ・2

平成28年11月12日10：00～14：00  
基町ショッピングセンター中央広場

学生参加者…

広島市立大学学生（11名）、広島修道大学学生（4名）

来場者数…186名



基町プロジェクトが継続的に行っている取組の一つとして、広島市立大学と広島修道大学の学生が主体的に取り組む「もとまちカフェ」があります。「もとまちカフェ」は、基町住宅地区内外の人との交流機会を創出することを目的に、毎週木曜に行われるミーティングでの企画立案を通じて、1年を通じて、屋台カフェや作品制作を行っています。

シンポジウム当日には、基町ショッピングセンター周辺に、国内外から多くの人が集まることが予想されることから、オリジナルレシピのハーブティやサブレ、シフォンケーキを提供しながら、制作中の映像作品のデモンストレーション展示などを行いました。

た。シンポジウムが開始するまでの限られた時間ではあつたものの、ショッピングセンター中央広場は多くの来場者で賑わいました。

また、準備期間中において、地域住民と学生の交流カフェをはじまりました。このことは、カフェのメンバーが、基町ならではのお菓子を作ろうと考えるきっかけとなり、駐車場、ショッピングセンター、屋上緑地と三層構造の人工地盤を模したオリジナルレシピのサブレが完成しました。また、ハーブティは、基町で育てたハーブを使用し、様々なブレンドを試飲しながら味を決めており、これらを提供するパッケージデザインやスタッフウェアなどもデザインや工芸を学ぶ学生の手によって制作されました。



## シンポジウム会場での展示



### パノラマ基町

基町プロジェクトの一環として取り組んでいるデジタルアーカイブプロジェクトでは、基町住宅地区周辺の超高精細パノラマ写真『パノラマ基町』の撮影・公開を行っています。シンポジウムの壇上背景として、アパート屋上から平和記念公園方向を撮影したパノラマ写真を掲げました。

### 基町／相生通り調査地図

現在の太田川基町環境護岸周辺にかつて存在していた基町／相生通りの現地調査地図を、広島市公文書館と調査者（千葉桂司氏、矢野正和氏、山下和也氏）の協力を得て、シンポジウム関連資料としています。シンポジウムの壇上背景として、アパート屋上から平和記念公園方向を撮影したパノラマ写真を掲げました。



### 小学生制作模型展示

8月に、基町小学校5年生5名が、プロジェクトスタッフや広島市立大学生のサポートを受けながら制作した、基町にある被爆樹を紹介する模型をシンポジウム会場内で展示しました。基町高層アパート建設以前の基町の様子を想像するこ



### 写真展ディスプレイ

基町プロジェクトの一環として、毎年8月に開催している「基町、昔の写真展」から写真を一部選出し、ディスプレイモニタによるスライドショーで展示しました。生活性味の溢れる写真や建設中の基町高層アパートの写真を通じて、撮影当時の基町の様子を紹介するこ



写真・図版クレジット

1979) p.7

図版29.. 藤本昌也

表紙

図版12.. 出典基町地区再開発促進協議会編『基町

地区再開発事業記念誌』(広島県・広島市発行、

図版30.. 藤本昌也

基町プロジェクト「デジタルアーカイブプロジェクト

1979)

図版31.. 大高建築設計事務所

ト」で)提供いただいた写真

図版32.. 藤本昌也

発表1 「基町における応急住宅・不法住宅の成立と

その後」

図版33.. 藤本昌也

発表1 「基町における応急住宅・不法住宅の成立と

その後」

図版34.. 藤本昌也

発表者=石丸紀興

図版14.. 話者発表スライドより再作図

図版35.. 藤本昌也

発表者=藤本昌也

図版15.. 広島市

図版36.. 藤本昌也

図版1.. 話者発表スライドより再作図

図版16.. 广島市広報課

図版37.. 藤本昌也

図版2.. 話者発表スライド

図版17.. 广島市公文書館

図版38.. 藤本昌也

図版3.. 出典第一復員省編『日本都市戦災地図』(原

書房発行、国立国会図書館蔵版、1983) pp.208-

図版39.. 藤本昌也

図版4.. 出典『広島被爆40年史／都市の復興』p.32

図版40.. 藤本昌也

図版5.. 出典『広島被爆40年史／都市の復興』p.33

図版41.. 藤本昌也

図版6.. 出典広島市公文書館所蔵『昭和二十一年版

図版42.. 藤本昌也

市勢要覧(復興第一年號)』p.40

図版43.. 藤本昌也

図版7.. 集落構造研究会

図版44.. 藤本昌也

図版8.. 出典基町地区再開発促進協議会編『基町

図版45.. 藤本昌也

地区再開発事業記念誌』(広島県・広島市発行、

図版46.. 藤本昌也

1979) p.6

図版47.. 藤本昌也

図版9.. 出典基町地区再開発促進協議会編『基町

図版48.. 藤本昌也

地区再開発事業記念誌』(広島県・広島市発行、

図版49.. 藤本昌也

1979) p.12

図版50.. 藤本昌也

図版10.. 集落構造研究会

図版51.. 藤本昌也

図版11.. 出典基町地区再開発促進協議会編『基町

地区再開発事業記念誌』(広島県・広島市発行、

図版52.. 藤本昌也

図版28.. 藤本昌也

41ページ(4段目写真).. 高岡和彦

その他の写真.. 橋本健佑

## シンポジウム開催に際して

本シンポジウムは、基町プロジェクト平成28年度のプログラムの1つとして企画されました。本記録をまとめるにあたり、基町プロジェクトと本シンポジウムの関係について、以下簡単に説明します。

基町プロジェクト……「基町プロジェクト」は、平

成25年7月、広島市が地区住民と連携して策定した「基町住宅地区活性化計画」に掲げる「基町アートロード、アートによる魅力づくり」の実現を目指す取組であり、その目的は、「若者が主体となつた、創造的な文化芸術活動や地域交流を通じた、まちの魅力づくりや活性化」です。

基町に置ける「創造的な文化芸術活動」……基町は、これまで様々な歴史的出来事の現場でした。そして、様々な人物がその時々の状況における諸課題に対して、創意工夫を持って取り組んできることを、私は知っています。そうした歴史的仕事を、建設的に継承していくことが、この地域における「まちの魅力づくりや活性化」に繋がると考えています。

シンポジウム……基町高層アパートの設計・建設に携わった大高正人の仕事を振り返りながら、現在、

基町高層アパートを中心として地域が抱えている諸課題に、これから私たちがどのように取り組んでいくことができるのか。また、この地域と建築の魅力をどのように継承可能かを、登壇者と来場者の方々と一緒に考えることを目的として企画しました。その為、発表の構成については、大きく3つのパート

(基町アパート以前、基町アパート建設、現在の基

町と行政)に分けて、3名の登壇者に論じていただきました。

「基町アパート以前」まずはアパートが建てられる以前、基町がどのような歴史的・社会的背景を持つ地であったか、石丸紀興先生に発表していただきました。

「基町アパート建設」次に基町アパートが当時どのような志で計画され、使用されてきたか。そして今後の展望について、藤本昌也先生に発表していただきました。

「現在の基町と行政」更に、基町高層アパートは広島市営住宅ですので、広島市が行政として地域の活性化にどのように取り組んでいるか、基町住宅担当課長の小林礼幸様に発表していただきました。

その後、休憩を挟み、京都工芸纖維大学の松隈洋先生に司会をお願いし、発表者によるパネルディスカッションを行いました。なお、事情により本記録への掲載を見合わせましたが、来場いただいた方から、基町アパートの設計・建築当時の様子を紹介する貴重な発言がありました。

また、本シンポジウムは、文化庁との共催事業であります。文化庁国立近現代建築資料館において、『建築と社会を結ぶ—大高正人の方法』展が開催(2016年10月26日～2017年2月5日)されるにあたり、こうした機会を広島でも生かすといふこともあり、基町アパートにおいてもこれから基町について考える場を設けたいと考えました。

会場について……シンポジウム会場として広島市立

基町小学校体育館を選んだ理由は、2つあります。

1つ目には、この体育館が基町高層アパートの中心にあるということ。2つ目には、丹下健三が平和記念公園を設計する際に引いた南北軸を、北に延長した場所に、この体育館がおおよそ位置していることです。この2つの理由から、この体育館は基町の過去・現在・未来を、広島の過去・現在・未来へとより広い視野で考えるのに象徴的な場所だと考えました。

最後に、

本シンポジウム開催にあたり多くの方々のご協力を賜りました。この場を借りて深くお礼申し上げます。

中村圭（広島市立大学芸術学部・講師）

基町プロジェクト・シンポジウム2016

広島基町高層アパートと大高正人

編集・レイアウト：中村圭

原稿作成・長島明夫

謝辞

基町プロジェクト・シンポジウム2016 「広島基町高層アパートと大高正人」の開催、及び、本記録作成に当たり、ご協力いただきました関係各位に心からお礼申し上げます（敬称略・五十音順）。

基町プロジェクト

<http://motomachi-project.net>

シンポジウム「広島基町高層アパートと大高正人」

<http://mps1.strikingly.com>

発行：広島市立大学

2017年12月10日初版発行

石丸紀興、井上裕之、今井信博、顕原澄子、笠原一人、木原一郎、小林礼幸、千代章一郎、高田真、高田由美、千葉桂司、中川利國、錦織亮雄、福馬晶子、藤本貴子、藤本昌也、松隈洋、三宅拓也、矢野正和、山下和也

アーキウォーク広島、坂出市建設経済部建設課、広島市公文書館、広島市立基町小学校、基町地区社会福祉協議会、基町連合自治会

お問い合わせ：広島市立大学社会連携センター

〒731-3194 広島市安佐南区大塚東3-4-1

電話：082-830-1542

ファクシミリ：082-830-1555

[shakai@office.hiroshima-cu.ac.jp](mailto:shakai@office.hiroshima-cu.ac.jp)

平成28年度～平成29年度広島市立大学指定研究『文化芸術創造活動拠点を通じた広島都心部（基町地区）の活性化に関する研究』

平成28年度～平成29年度広島市立大学受託研究『大学と行政の協働による創造的な文化芸術活動や地域交流等を通じた、基町住宅地区の魅力づくりや持続的な活性化に関する研究』



